

さ いき じょう か まち い せき
佐 伯 城 下 町 遺 跡

やま なか け や しき あと
山 中 家 屋 敷 跡

平成21年度街なみ環境整備事業旧山中邸広場整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

2013

大 分 県
佐 伯 市 教 育 委 員 会

序 文

本書は平成 21 年度街なみ環境整備事業旧中山邸広場整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録です。

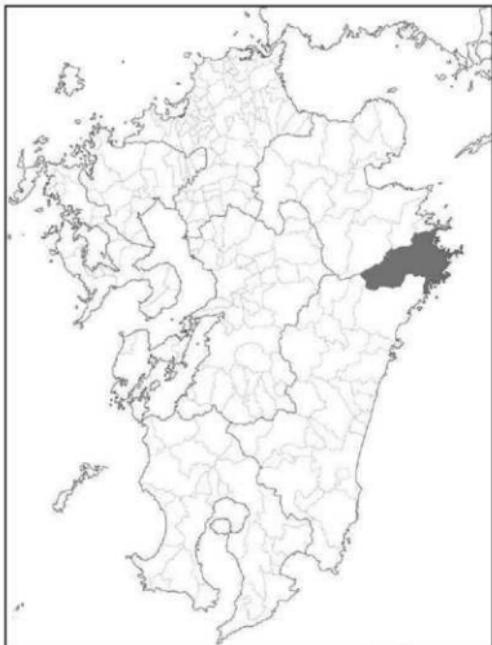
調査地点の周辺は近世武家屋敷の景観を残す、通称山際通りと呼ばれる家臣団居住地であり、背後の佐伯城とも相まって佐伯市のシンボルとして親しまれています。この地を整備するにあたって、地元からも武家屋敷の風情を残してほしいとの要望もあり、史跡広場として整備することとなりました。発掘調査の結果確認された近世から近代に至る遺構や遺物も活かされた広場となったことで、より佐伯市の歴史に理解が深まることだと思います。

本書が埋蔵文化財保護ならびに郷土に対する愛着を深め、歴史研究の一助となることを期待します。

平成 25 年 3 月 31 日

佐伯市教育委員会

教育長 分 藤 高 嗣



例　　言

1. 本報告書は平成21年度街なみ環境整備事業旧山中邸広場整備工事に伴って行われた埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 調査地は大分県佐伯市城下東町799番に所在する。
3. 発掘調査は佐伯市教育委員会が主体となり、平成21年4月15日から7月15日にかけて発掘調査を行った。また、発掘調査における作業員の派遣は（社）佐伯市シルバー人材センターに、遺構実測は（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託して行った。
4. 報告書の作成は佐伯市教育委員会文振興課嘱託五十川慎也の補助を受けて福田聰が行った。また、遺物実測・トレース作業と一部の写真撮影を雅企画（有）に委託して行った。
5. 本報告書で用いる方位は座標北、座標は世界測地系、標高は絶対高である。
6. 組織統合により、佐伯市教育委員会文化振興課は平成24年4月1日から佐伯市教育委員会社会教育課文化振興係となって業務を引き継いでいるが、本書では文化振興課として記載する。
7. 調査に係る記録類や遺物は佐伯市教育委員会が保管している。

目　　次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査にいたる経緯	2
第2節 調査の体制	2
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査の成果	8
第1節 調査の概要	8
1 調査の方法	8
2 遺跡の層序	8
第2節 近代以降の調査	12
1 遺構	12
2 遺物	16
第3節 近世の調査	18
1 遺構	18
2 遺物	27
第Ⅳ章 まとめ	36

挿 図

第1図 調査地点周辺遺跡地図	5
第2図 周辺地形図	6
第3図 各時期における調査地点周辺	7
第4図 基本層序模式図	8
第5図 トレンチ・土層断面位置図	9
第6図 土層断面図	10
第7図 近代遺構配置図	13-14
第8図 近代山中家屋敷間取り図	15
第9図 近代整地層出土遺物	17
第10図 近世遺構検出状況	19-20
第11図 近世遺構配置図	21
第12図 S 1 平面図・断面図	22
第13図 S 2 平面図・断面図	22
第14図 S 3 平面図・断面図	22
第15図 S 4 平面図・断面図	22
第16図 S 5 平面図・断面図	22
第17図 S 2 出土遺物	22
第18図 S 3 出土遺物	22
第19図 S 5 出土遺物	22
第20図 S 6・S 7・S 8 平面図・断面図	23
第21図 S 7 出土遺物	23
第22図 S 8 出土遺物	23
第23図 S 9 平面図・断面図	24
第24図 S 9 出土遺物	24
第25図 S 10 平面図	25
第26図 S 10 出土遺物	25
第27図 第Ⅲ層～第Ⅵ層出土遺物 1	28
第28図 第Ⅲ層～第Ⅵ層出土遺物 2	29
第29図 第Ⅲ層～第Ⅵ層出土遺物 3	30
第30図 第Ⅲ層～第Ⅵ層出土遺物 4	31
第31図 第Ⅶ層～第Ⅸ層出土遺物 1	31
第32図 第Ⅶ層～第Ⅸ層出土遺物 2	32
第33図 第Ⅶ層～第Ⅸ層出土遺物 3	33

図 版

図版1	38
山中家屋敷跡 整備計画	
図版2	39
調査区全景 第Ⅱ層上面	
南北方向土層1	
南北方向土層2	
図版3	40
第Ⅱ層上面 烧土	
第Ⅱ層中 玄関石列	
第Ⅱ層上面 台所排水	
第Ⅱ層上面 式台	
第Ⅱ層上面 風呂・便所	
第Ⅱ層上面 瓦賀便槽	
第Ⅱ層上面 石敷き	
第Ⅱ層上面 庭の側溝	
図版4	41
調査区全景 第Ⅸ層上面	
図版5	42
S 2 検出状況	
S 2 土層	
S 3 検出状況	
S 3 完掘状況	

S 4 土層	S 8 遺物出土状況
S 5 土層	S 10 遺物出土状況
図版 6	43
S 9 検出状況	第Ⅸ層上面 磁検出状況
S 9 焙烙出土状況	発掘作業風景
図版 7	44
山中家屋敷 薬医門	山中家屋敷跡整備後（山際史跡広場）
図版 8	45
第Ⅰ層出土遺物	第Ⅱ層出土歯ブラシ柄
第Ⅱ層出土遺物 1 (陶磁器)	S 2 出土遺物 1 (水鉢)
第Ⅱ層出土遺物 2 (歯ブラシ)	S 2 出土遺物 2 (鉢)
図版 9	46
S 7 出土遺物	S 8 出土遺物 1
図版10	47
S 8 出土遺物 2 (金具)	S 9 出土遺物 2 (焙烙)
S 9 出土遺物 1 (かんざし)	S 9 出土遺物 3 (焙烙・ガラス製品以外)
図版11	48
S 10 出土遺物 1 (土師器)	S 10 出土銭貨に錆着した纖維
S 10 出土遺物 2 (銭貨)	
図版12	49
第Ⅲ層～第Ⅵ層出土遺物 1 (碗・皿・蓋)	第Ⅲ層～第Ⅵ層出土遺物 2 (碗・皿・蓋以外)
図版13	50
整地層出土小坏 (58)	第Ⅲ層～第Ⅵ層出土遺物 4 (人形)
第Ⅲ層～第Ⅵ層出土遺物 3 (瓦)	第Ⅲ層～第Ⅵ層出土遺物 5 (火打ち石)
図版14	51
第Ⅶ層～第Ⅸ層出土遺物 1 (碗・皿・蓋)	第Ⅶ層～第Ⅸ層出土遺物 2 (碗・皿・蓋以外)

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯

調査地を含む通称山際通りは、県指定有形文化財「佐伯城三の丸櫓門」と、佐伯藩主毛利家の菩提寺である養賢寺を結ぶ通りである。近世においていわゆる武家屋敷通りであり、現在も土塀や瓦屋根など、当時の雰囲気を感じられることから多くの観光客が訪れている。来街する観光客に対応した具体的事業を実施する予定で、山中家屋敷跡を含む旧山中邸敷地を平成8年度に佐伯市が買い取った。しかし、活用策が決まらない状態が続いていた。

一方で山際地区を含む佐伯市中心市街地では、活性化のために市民による「まちづくり活動メンバー会議」が組織されている。この部会の一つである「歴史文化街なみ部会（以下「部会」）」において、平成17年度から山中家屋敷跡の整備の方策や、その後の活用策についての検討が始まった。この部会の中で、山中家屋敷跡は武家屋敷という歴史を活かした公園として整備・公開するという大枠の方針が見出された。

まずは老朽化が進んでいた土塀と薬医門の修復を行うこととなり、平成19年度に街なみ環境整備事業の補助を受けて佐伯市都市計画課が実施、平成20年度に完了した。

この間も部会での会議は重ねられ、公園化の内容や管理方法についての意見の集約が図られた。最終的には平成20年7月の部会において、現在も敷地に残る礎石を利用しつつ、主屋部分の整地によって武家屋敷の間取りが分かるよう整備することなどが決定した。

このため、佐伯市教育委員会では平成20年10月27日から10月31日にかけて確認調査を行った。調査の結果、現状で地表面に露出している礎石は近代以降に据えられたものが含まれているが、これらの礎石の下位には近世の遺構が存在することを確認した。

さらに平成21年2月の部会において、都市

計画課から街なみ環境整備事業を利用した公園整備の具体案が提示された。平成21年度に発掘調査を実施し、同年度中に公園として完成させる計画である。また、屋敷の間取りは表面の舗装方法の違いによって表すこと、礎石や庭石は平面的に復元し、必要に応じて据え直すこと、そのため発掘調査の際に礎石や庭石の詳細な記録を作成すること、屋敷の外側は芝や地被類の植栽を行うことなどが決定した。

この計画に基づき、平成21年4月27日から7月15日まで発掘調査を行った。街なみ環境整備事業の一環として、調査に関する予算は都市計画課が執行し、調査業務は文化振興課が担当した。その後の整理作業は文化振興課の単独事業として実施した。なお、組織統合により平成24年度から文化振興課は社会教育課となり、業務を引き継いでいる。

第2節 調査の体制

調査は以下の体制で実施した。

【調査主体】

佐伯市教育委員会

教 育 長 武田 隆博（平成20年度）

分 藤 高嗣（平成21～24年度）

【調査事務】

教育委員会文化振興課（平成20～23年度）

課 長 竹中 伸吾（平成20～21年度）

河野 宜弘（平成22～23年度）

課長補佐 今山 勝博（平成23年度）

参 事 大石 定廣（平成20～21年度）

係 長 今山 勝博（平成20～22年度）

吉武 牧子（平成23～24年度）

主 任 福田 晃（平成23年度）

事 務 員 福田 晃（平成20～22年度）

教育委員会社会教育課（平成24年度）

課長 福嶋 裕子（平成24年度）

課長補佐 今山 勝博（平成24年度）

係長 吉武 牧子（平成24年度）

主任 福田 聰（平成24年度）

【確認調査】

事務員 福田 聰（平成20年度）

【本調査】

事務員 福田 聰（平成21年度）

嘱託 五十川慎也（平成21年度）

【整理作業】

主任 福田 聰（平成22～24年度）

事務員 福田 聰（平成21年度）

嘱託 五十川 慎也（平成21～24年度）

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

佐伯市は大分県の最南端に位置し、903km²という九州でもっとも広い市域を有している。東は豊後水道に臨み、日豊海岸国定公園に含まれる海岸線は半島、湾、離島が複雑に連続する典型的なリース式の海岸である。海は温暖な黒潮と河川からの養分の供給によって豊かな漁場として知られているほか、南部ではサンゴ礁や熱帯魚も見ることが出来る。海岸や離島には亜熱帯性植物の自生も見られ、渡り鳥の中継地としても貴重である。

内陸部を見ると、北は津久見市と白杵市、西は豊後大野市、南は宮崎県延岡市と接している。九州山地に連なる山々を境界とし、特に西と南は祖母傾国定公園の一画をなす。険しい地形のなかには洞穴や渓谷、原生林が点在し、絶滅が危惧されている国指定天然記念物ニホンカモシカも生息する。

これらの山には豊富な水が蓄えられ、大小多数の清流がある。河川は上中流域では小規模な盆地を形成しながら合流を繰り返し、下流域では運搬した土砂によって扇状地性の低地をつくり、ほとんどは豊後水道へと注ぐ。こうしてできた盆地や低地は、数少ない平坦地として古くから生活が営まれている。佐伯市のシンボルの一つである一級河川番匠川も同様で、多くの支流を東ねながら東流し、佐伯湾に流れ込んでいる。現在の佐伯市中心市街地は、番匠川河口の沖積地を埋め立てて形

成された近世城下町を基礎としたものである。

このように佐伯の地形は変化に富み、そのなかで育まれる動植物相も非常に豊かである。しかし、全体に起伏が激しく平坦地が少ないので集落が発達する場所は限られている。さらに交通に関しては不便を来しており、特に陸路は三方を山に囲まれている状態である。一方で、海路に関しては豊後水道を往来する際の中継地点として重要な位置を占めている。

第2節 歴史的環境

佐伯の歴史をみると、旧石器時代に関しては遺物がわずかに散見されるものの、生活の痕跡を伴う遺跡は未だ発見されていない。縄文時代になると、早期の遺跡が山間部に点在する。河口部近くでも長良貝塚や下城遺跡で押型文土器が出土している。門前遺跡では早期前葉須の土器群と多数の集石遺構が検出された。前期以降には再び資料に乏しくなるが、晩期土器は各地で採集されている。

弥生時代には番匠川と堅田川下流域において重要な成果が上がっている。まず堅穴建物と貝塚で集落を構成する下城遺跡がある。東九州の弥生時代前期末から中期を代表する下城式土器の標識遺跡として知られている。白潟遺跡でも貝塚を伴う同時期の集落構造が確認されているほか、長良貝塚では中期の貝層

から鉄鎌と鉄滓が出土しており、鍛冶遺構の存在を推定させるものとして注目される。

古墳時代となると、番匠川と堅田川の下流域周辺に古墳が点在している。現在は低地に面した丘陵や斜面上に位置しているが、それらの低地の多くは後世の沖積作用や埋立造成によって陸地化した部分であり、本来は川を見下ろす位置に造築されたものと考えられる。いくつかは発掘調査が実施されており、萩山古墳は前期末から中期、宝劍山古墳と樅野古墳は中期後半頃の築造と考えられる。樅野古墳の溝から出土した土師器は宮崎平野に系譜を求められるもので、両地域の交流を考える上で重要な資料である。また後期の上小倉横穴群のような墳丘をもたない埋葬方法も見られるほか、集落遺跡としては汐月遺跡で中期に比定される竪穴建物が検出されている。

古代では靈龜元年(715)から天平11年(739)頃に作成されたとされる「農後國風土記」に記述があり、当時の佐伯地域沿岸部は律令制下における海郡部（あまべ）の槌門（はと）郷に属していたと考えられる。郡名は住民のほとんどが海辺の白水郎（あま）、つまり漁民であったことに由来するという。

時代が下ると佐伯の地名も見えるようになり、平安貴族の日記である「本朝世紀」に、乱を起こした藤原純友の次将佐伯は本が天慶4年(941)に佐伯院を襲撃したとする記述がある。院の推定地には、掘立柱建物と墨書き土器を出土した汐月遺跡や上の台遺跡の周辺が有力視されている。

その後、佐伯院は荘園公領制の発展によって佐伯莊に組み入れられていく。以後中世の佐伯地域を支配したのが大姓佐伯氏の一族であった。大友氏の豊後入国に伴いその配下となるが、佐伯地方で独自の勢力を保っていた。佐伯氏の統治は中世末まで続き、その中心は梅牟礼山東の古市地区周辺である。周辺には鎌倉時代造立とされる十三重塔をはじめ、佐伯氏にまつわる伝承とともに多くの石塔類

が存在する。

梅牟礼城は中世末期の佐伯氏の拠点となった山城であり、佐伯惟治によって大永年間（1521～1528）に築かれたと言われる。大永6年(1526)に大友氏への謀反を疑われて攻められた佐伯惟治が籠城し、落城はしなかつたものの翌年に惟治は自害。さらに弘治2年(1556)には佐伯惟教も謀反の嫌疑をかけられ、惟教は一族を率いて伊予へ逃れた。これにより梅牟礼城は大友氏の管理下に置かれるが、永祿12年(1569)に惟教の帰参が許され、佐伯氏に返還された。天正6年(1578)、大友義鎮（宗麟）の日向侵攻に従軍した惟教は高城川原での大敗で戦死。天正14年(1586)に始まる島津氏の豊後侵攻に際して、佐伯地域への侵入を佐伯惟定が阻止し、惟定は豊臣秀吉から感状を受けている。このうち惟定は文祿2年(1593)の大友氏の改易に伴って佐伯を去り、佐伯氏の支配は終焉を迎える。

梅牟礼城跡や古市遺跡の周辺では数次にわたる確認調査が実施されている。梅牟礼城跡の曲輪からは15世紀後半～16世紀前半と、16世紀後半の2時期の遺物があり、それぞれ大永年間と天正年間の戦闘に対応する遺物ではないかと注目される。古市遺跡では13世紀後半～14世紀前半の遺物が出土することから、古市地区の成立は鎌倉時代後半まで遡る可能性が高いことも分かってきた。ところが居館跡と推定されていた曳地館跡では中世に遡るもののは発見されず、居館の位置は不明なままである。近年、梅牟礼城跡の周辺では東九州自動車道建設に伴う発掘調査事例が急増しており、その成果が期待される。

佐伯氏が去ったのち、慶長6年(1601)に毛利高政が入部して佐伯藩の歴史が始まる。藩領は現在の佐伯市から宇目を除き、津久見市南部を加えた範囲に相当する。石高は公式には2万石とされるが、「佐伯の殿様浦でもつ」の言葉どおり、豊富な海産資源を含める実質はそれ以上であったと言われる。

佐伯藩初代藩主・毛利高政は入部すると新たな居城と城下町の建設に取り掛かる。番匠川河口の沖積地がその地に選ばれ、八幡山（城山）に鶴屋城（佐伯城）、その東の低地を埋め立てて佐伯城下町がつくられた。当時この地には塩屋千軒とも呼ばれ製塩を営む集落があったが、高政は彼らを移住させて城下町を建設したと伝えられる。

鶴屋城は標高144mの山頂に築かれた平山城で、築城開始は慶長7年（1602）、竣工は慶長11年（1606）と言われる。石垣によって本丸、二の丸、西出丸、北出丸を設け、三重の天守を備えていた。ところが築城から程なく天守を焼失し、以後天守が再建されることはない。寛永14年（1637）、三代・高尚の時代には藩政の不便と藩主の幼年を理由として東山麓に三の丸を建設し、藩庁機能を移している。

城下町建設は鶴屋城築城と併行して行われ、鶴屋城の東南麓に武家地、東と南には町人地が配置された。町人地は大きく内町と船頭町に分けられ、東の内町は主に商家、南の船頭町は水主の居住地である。城下町を取り巻くように流れる番匠川やいくつかの分流、沼地などを掘りとして利用する。街路は鶴屋城に向かう筋を主軸にして、これに直行する筋が整備されており、各所に食い違い路や丁字路がある。点在する寺社は有事の際の拠点を企図したものであるとも考えられる。このように設計された城下町は、幾度かの大火や災害を契機に再編を繰り返しつつ整備されていった。

近世の発掘調査事例として特筆すべきは天祐館跡の調査成果である。天祐館は文久3年

（1863）に十一代藩主毛利高泰の隠居のため建てられた別邸である。明治5年（1872）頃には一部を移築して解体されたと言われる。発掘調査によって天祐館の建物基礎を検出し、指図とも合致することが確認された。

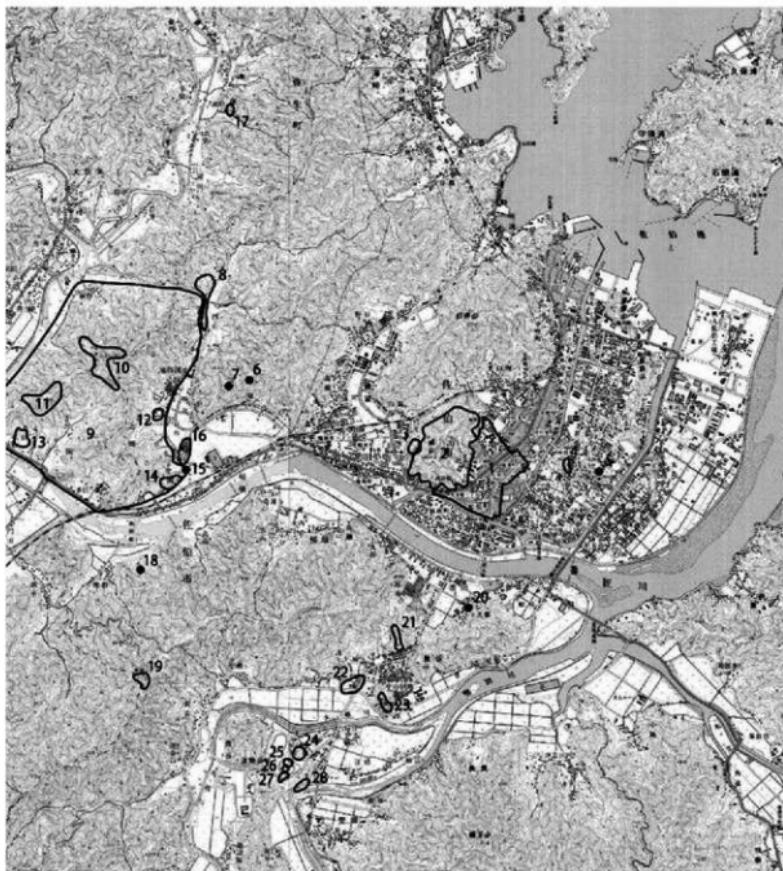
山中家屋敷跡は、比較的上級の家臣団居住地であった山際地区の一画に位置する。屋敷地は東西で上下二段に別れ、今回の調査対象はこのうち面積の広い東側の下段である。近世では道を挟んで北西に武家屋敷が建ち並び、南東は湿地を開けていたことが絵図から確認できる。平成13年に周囲で発掘調査が行われており、山中家屋敷跡上段では遺構・遺物は検出されなかったが、西に隣接する竹中家屋敷跡では18世紀後半～19世紀前半の遺物と同時期と推定される石垣が確認された。このときの発掘調査報告書によって、山際地区的武家地では近世中期から後期の間で居住者の移動が行われていることが指摘されている。山中家屋敷跡も元文3年（1738）時点では羽野家の屋敷地であったものが、文政9年（1826）の絵図では山中家となっており、以降は現代まで山中家の敷地であった（第3図）。

平成8年度に佐伯市が土地を買い取った時点では、居住者はおらず下段に残されていた主屋と土蔵を解体したが、近世の遺構である可能性を示す調査結果が（社）大分県建築士会佐伯支部青年部より出されていたため、礎石は残されることとなった。

今回の発掘調査開始の時点では、薬医門と土堀に開まれた敷地内に礎石・井戸・景石と植栽等が残されている状態であった。

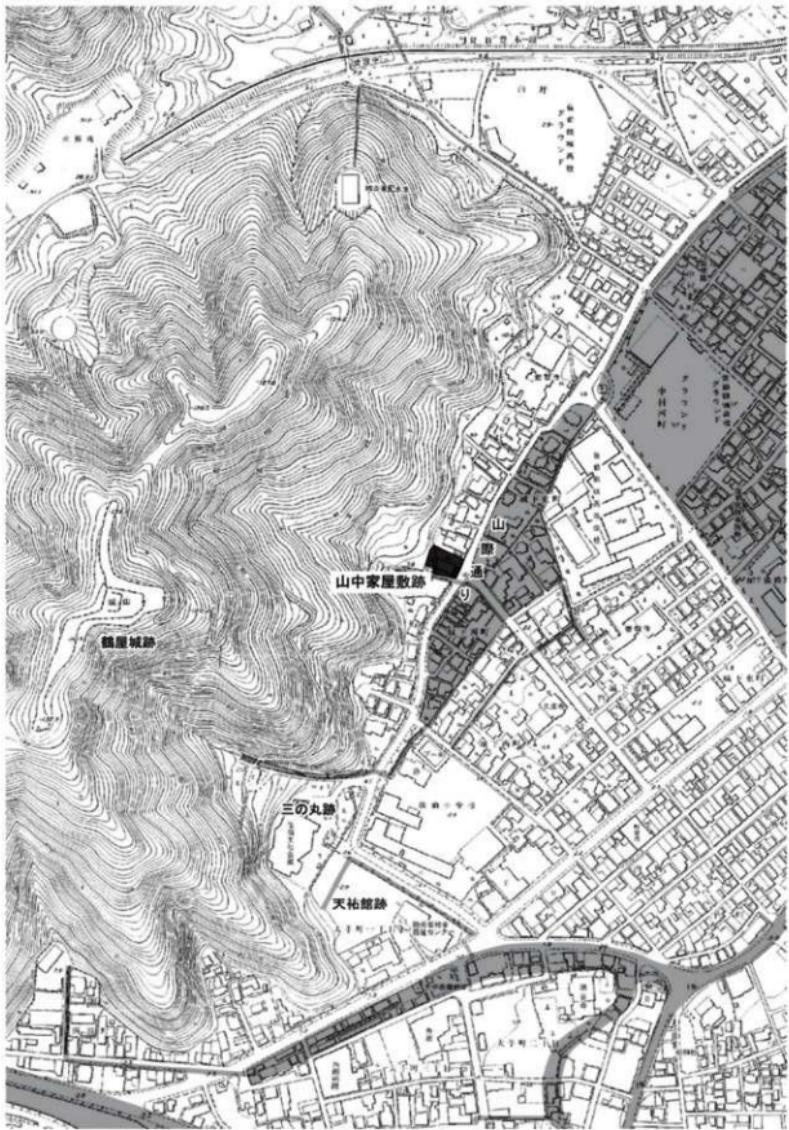
【参考文献】

- 大分県教育厅埋蔵文化財センター 2005 『津久見門前遺跡 濱戸遺跡 佐伯門前遺跡』 大分県教育厅埋蔵文化財センター
調査報告書第3集
佐伯市史編さん委員会 1974 『佐伯市史』
佐伯市 1982 『佐伯歴史文化環境整備計画のための調査報告書』
佐伯市教育委員会 1989 『佐伯氏一族の興亡』
佐伯市教育委員会 1990 『汐月遺跡』
佐伯市教育委員会 1994 『梅辛礼城跡関連遺跡発掘調査報告書』
佐伯市教育委員会 1998 『櫻野古墳』
佐伯市教育委員会 1998 『天祐館遺跡』
佐伯市教育委員会 2003 『佐伯城下町遺跡 山中家屋敷跡・竹中家屋敷跡』



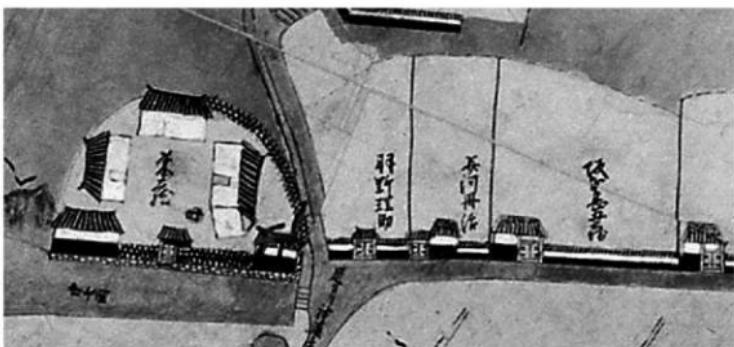
1. 佐伯城下町	2. 鶴屋城跡	3. 白潟遺跡	4. 莖山遺跡群	5. 宝剣山古墳
6. 三上寺跡	7. 二上寺跡	8. 佐伯門前遺跡	9. 梅牟礼遺跡	10. 梅牟礼城跡
11. 小田山城跡	12. 斎地館跡	13. 小田山館跡	14. 木戸城跡	15. 十三重塔
16. 古市遺跡	17. 瀬戸遺跡	18. 横野古墳	19. 高城跡	20. 岡ノ谷古墳
21. 中山砦跡	22. 下城遺跡	23. 八幡山城跡	24. 長良貝塚	25. 上ノ台館跡
26. 上ノ台遺跡	27. 汐月遺跡	28. 宇山城跡		

第1図 調査地点周辺遺跡地図 (1 / 50,000)



*アミカケは絵図から推定した川・溝田

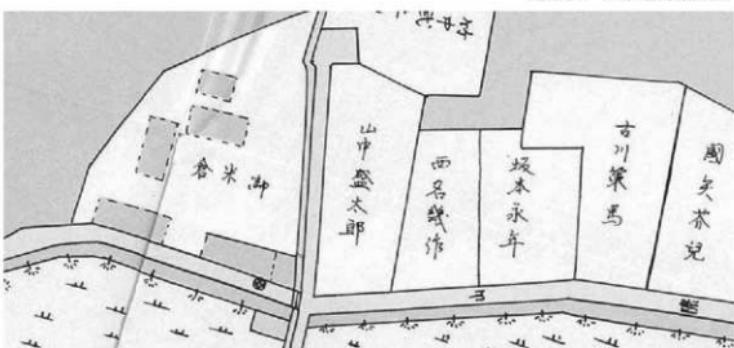
第2図 周辺地形図(1/5,000)



元文三年 御城并御城下繪図



文政九年 御城下分見明細図繪



明治四年頃 佐伯藩時代屋敷図

第3図 各時期における調査地点周辺

あるいはこれも絵図の右が北東

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の概要

1 調査の方法

第Ⅰ章で述べたように、今回の発掘調査は公園造成に伴うものであり、造成工事の主な内容は礎石の再設置と屋敷の間取り復元のための舗装である。従って発掘調査は礎石の残る範囲内について行い、そのほかはトレント調査による補助的な情報収集をすることとした。トレントは確認調査時の9箇所に加えて4箇所を本調査中に設定した。その結果、調査対象は敷地の最下段、住宅と庭にあたる部分の750m²となった。

なお、礎石は原位置で復元する必要性と人力で動かす危険性を考慮し、動かさずに掘り残して調査を進めた。

2 遺跡の層序

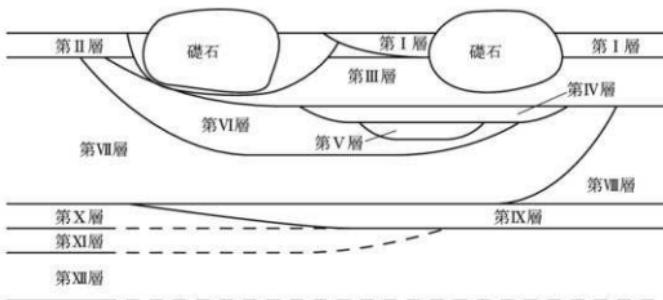
調査区内には平成8年まで残されていたの住宅の礎石がある。土層観察は地表面に残されている礎石の軸により、2方向から行った(第5図・第6図)。確認調査時のトレントによって途切れた部分については、補足として直近の土層を図化している。土層注記は各図ごとに新しい層から順に層番号を付して行

い、これをもとに作成した基本層序によって掘削や遺物の取り上げを行った(第4図)。

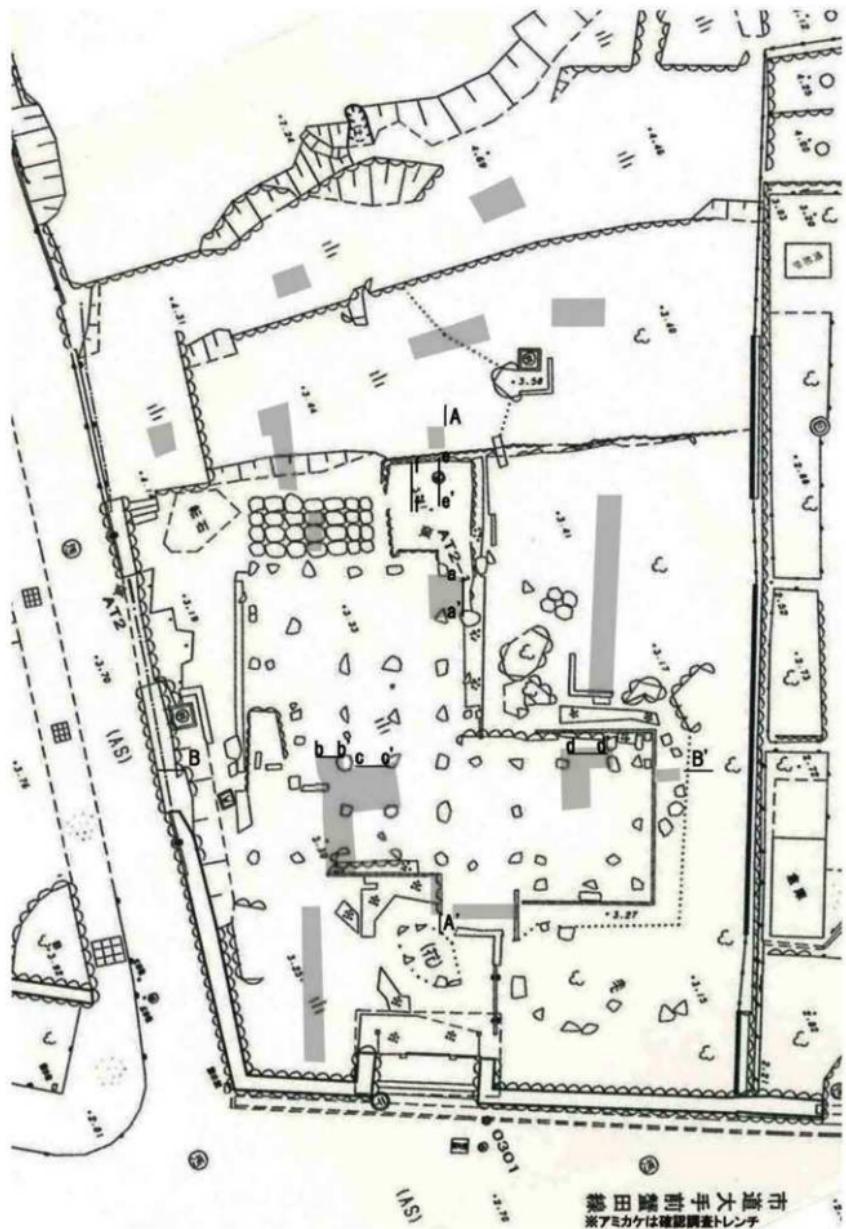
基本層序は第Ⅰ層から第ⅩⅡ層まで設定した。腐植土である第Ⅰ層と基盤層と考えられる第Ⅺ層以下を除いて、人為的な整地層である。

第Ⅰ層は主に旧山中家住宅の建物外側で検出した腐植土、第Ⅱ層は主に建物内側の表土であり、近現代の遺物を含んでいる。地表面に露出していた礎石とそれに関連する遺構の検出層である。第Ⅲ層から第Ⅸ層までは近世の遺物を含む層である。特に第Ⅲ層と第Ⅶ層が広い範囲で確認され、遺物量も多い。第Ⅳ層は黄褐色系でしまりの強い層である。はつきりとはしないが、礎石の下位や遺構の上位に敷かれる傾向があり、沈下防止を目的としたものと考えられる。旧山中家住宅の風呂場・便所を含む屋敷地西側では第Ⅲ層から第Ⅵ層が確認されず、比較的浅いレベルで第Ⅶ層以下が見られる。第Ⅹ層以下からは出土遺物が多く、拳大の礎を多量に含む。地山であろうと考えられる。

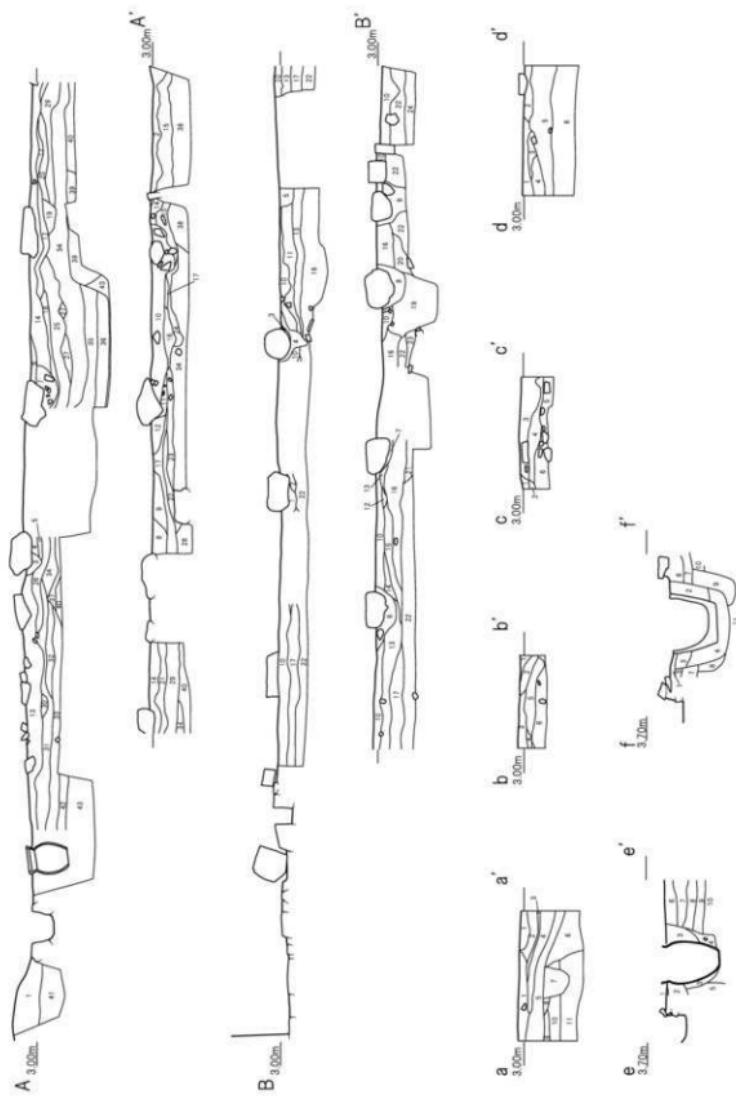
地表面に残されている旧山中家住宅の礎石は、多くが第Ⅱ層上面からの堀込みによって据えられているが、いくつかは堀込みが検出できなかった。



第4図 基本層序模式図



第5図 トレチ・断層断面位置図(1/200)



第6図 土層断面図(1/60)

A - A' 土層断面

番号	色調	所見	基本層序
1	黒色	土質が暗い。根柢なし。	
2	黒褐色	土質が暗い。根柢なし。	
3	暗赤褐色	土質が暗い。根柢なし。	
4	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
5	明黄褐色	土質が暗い。根柢なし。	
6	黒褐色	土質が暗い。根柢なし。	I
7	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
8	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
9	暗赤褐色	土質が暗い。根柢なし。	
10	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
11	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
12	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
13	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	II
14	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
15	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
16	中小赤・暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	III
17	明黄褐色	土質が暗い。根柢なし。	
18	褐色	土質が暗い。根柢なし。	IV
19	暗赤褐色	土質が暗い。根柢なし。	
20	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
21	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	V
22	暗黄褐色	土質が暗い。根柢なし。	
23	黒褐色	土質が暗い。根柢なし。	
24	黒褐色	土質が暗い。根柢なし。	
25	黒褐色	土質が暗い。根柢なし。	
26	やや明るい黒褐色	土質が暗い。根柢なし。	VI
27	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
28	やや暗い・暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	道構
29	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
30	やや明るい・暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
31	やや暗い・暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
32	やや暗い・暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
33	暗灰褐色	土質が暗い。根柢なし。	
34	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
35	やや赤い・暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	道構
36	黒褐色	土質が暗い。根柢なし。	
37	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
38	褐色	土質が暗い。根柢なし。	Ⅴ
39	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
40	暗黄灰色	土質が暗い。根柢なし。	Ⅵ
41	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	X
42	暗赤褐色	土質が暗い。根柢なし。	XI
43	明褐色	土質が暗い。根柢なし。	XII

B - B' 土層注記

番号	色調	所見	基本層序
1	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
2	明褐色	土質が暗い。根柢なし。	
3	褐色	土質が暗い。根柢なし。	
4	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	I
5	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
6	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
7	暗赤褐色	土質が暗い。根柢なし。	
8	暗褐灰色	土質が暗い。根柢なし。	
9	やや赤い・暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
10	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
11	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	II
12	黒褐色	土質が暗い。根柢なし。	
13	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	III
14	明褐色	土質が暗い。根柢なし。	IV
15	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	V
16	やや赤い・暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
17	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
18	やや暗い・暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	道構
19	暗赤灰色	土質が暗い。根柢なし。	
20	暗灰褐色	土質が暗い。根柢なし。	
21	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	
22	やや暗い・暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	Ⅴ
23	褐色	土質が暗い。根柢なし。	
24	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。	Ⅹ

a - a' 土層断面

番号	色調	所見
1	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
2	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
3	褐色	土質が暗い。根柢なし。
4	暗黄褐色	土質が暗い。根柢なし。
5	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
6	やや赤い・暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
7	明褐色	土質が暗い。根柢なし。
8	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
9	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
10	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
11	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。

b - b' 土層断面

番号	色調	所見
1	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
2	明褐色	土質が暗い。根柢なし。
3	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
4	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
5	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
6	やや暗い・暗褐色	土質が暗い。根柢なし。

c - c' 土層断面

番号	色調	所見
1	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
2	明褐色	土質が暗い。根柢なし。
3	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
4	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
5	やや暗い・暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
6	やや暗い・暗褐色	土質が暗い。根柢なし。

d - d' 土層断面

番号	色調	所見
1	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
2	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
3	茶褐色	土質が暗い。根柢なし。
4	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
5	やや赤い・暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
6	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。

e - e' 土層断面

番号	色調	所見
1	褐色	土質が暗い。根柢なし。
2	灰色	土質が暗い。根柢なし。
3	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
4	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
5	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
6	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
7	やや明るい・暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
8	暗灰褐色	土質が暗い。根柢なし。
9	暗赤褐色	土質が暗い。根柢なし。
10	明褐色	土質が暗い。根柢なし。

f - f' 土層断面

番号	色調	所見
1	黃褐色	土質が暗い。根柢なし。
2	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
3	暗灰褐色	土質が暗い。根柢なし。
4	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
5	褐色	土質が暗い。根柢なし。
6	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
7	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
8	暗灰褐色	土質が暗い。根柢なし。
9	暗褐色	土質が暗い。根柢なし。
10	暗赤褐色	土質が暗い。根柢なし。
11	明褐色	土質が暗い。根柢なし。

第2節 近代以降の調査

1 遺構

遺構は調査開始以前から地表面に露出していた礎石・景石類と第Ⅱ層の上面及び層中で検出したものである（第7図）。礎石は下半分が土中にあり、多くは第Ⅱ層上面からの堀込みによって据えられている。礎石の下位には5cmほどの礫が敷かれることもあるが、密度は低い。

平成8年までは住宅が建てられていたため、解体前の間取りとほぼ完全に対応する。平成3年に（社）大分県建築士会佐伯支部青年部（以下、建築士会）が武家屋敷としての間取り・保存状況調査を行っており、以下にその報告を参考しながら詳述する。特に室内意匠と各部屋の用途については建築士会の報告によっている（第8図）。

（1）敷地の構成

屋敷地のうち通りに面する部分には土塀を巡らし、東に薬医門を設ける。隣地との境界である北は竹垣で区画し、西は石垣による段を設け、さらにいくつかの平坦面をつくりつつ近世の竹中家屋敷跡、城山へと続く。なお、薬医門と土塀は平成19年度に修復工事を行っている。

門と主屋の間には築山があり、通りからの視線は遮られる。門から玄関まではモルタルにより舗装されていたが、旧来は飛び石が並んでいた可能性が高い。敷地内の中央に主屋があり、北側は庭園となる。トレンチ調査により池はなく、植え込みと景石で構成される庭であることが確認された。

主屋の南と西には井戸が掘られている。特に南側の井戸は主屋からほど近く、石敷きで舗装されている。主屋解体前の写真では庇が井戸の上まで延長されていた。2箇所の井戸はどちらも凝灰岩の板石を組み合わせた井戸枠で、地下部分は平面円形の石組である。

主屋の西奥には土蔵があったが、平成8年に主屋とともに解体され、土台の石積みと階段が残されている。また門を入って南には別棟の付属屋があり、戦後頃までは切手を販売していた。

（2）主屋とその周囲

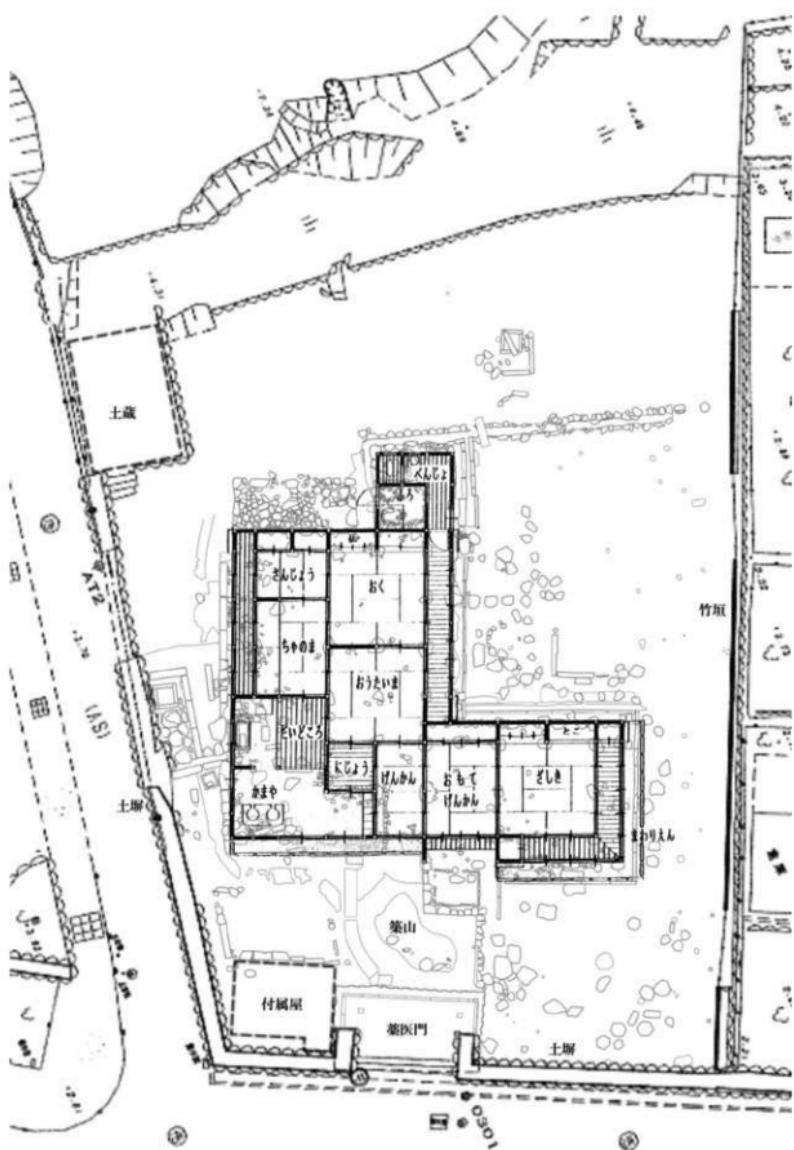
主屋の平面形は北西と北東に延びるL字形を呈し、格上の身分のものを迎える部分と日常生活のための部分に分かれれる。山中住宅の場合、玄関から北西が日常生活の場、北東が客間となっている。

玄関に入って南側は釜屋に続いている。入口と釜屋は土間となっており、発掘調査時も叩き土と見られる明褐色土が確認できたほか、玄関と土間の境にあたる位置に石列を検出した。叩き土の流出防止が目的であろう。釜屋には流しと二連のかまどがあったと推測されており、発掘調査ではかまどの位置に焼土を検出した。釜屋の中央にも焼土を検出したが、こちらは建築士会の調査では言及されていない。南に勝手口があり、すぐ外には井戸がある。女性や子供は普段こちらから出入りしていたという。また、流しのあった場所から凝灰岩と平瓦を組み合わせた排水溝が建物外へと続いており、井戸の側溝に合流して敷地外へと流す。この側溝底面はモルタルが塗られているが、その下には三和土が見える。建物解体前は勝手口から井戸まで庇が伸びていた。

釜屋の一角には板の間の台所が設けられ、茶の間と応対間に直接通じていた。釜屋から台所への上がり口には角柱状の凝灰岩が置かれる。ここから屋根裏の物置へ上がる階段があった。屋根裏は茶の間・三疊まで続き、このために両部屋の天井はほかに比べて低くなっていた。玄関の西奥は応対間である。通常の接客の間で、後述する座敷に比べると簡素な意匠であった。応対間の西には奥の間があり、床と仏壇を備え、主人の寝室である。応対間と奥の間からは庭を臨むことができる。



第7図 近代遺構配置図(1/120)



第8図 近代山中家屋敷間取り図(1/200)
※主屋の間取りは建築士会 1992による

地表面の腐植土層を除去し、T字形に設置された飛び石が明らかとなった。T字の一方は座敷前の飛び石に連なっている。

台所の西側は茶の間となり、普段の食事を摂る部屋である。食後は寝室として利用されることもある。茶の間の奥は三畳で、これは家族の寝室である。

玄関から北には表玄関がある。これは格上の身分の客を迎えるに冠婚葬祭のような特別な儀式の際に使用される玄関で、屋外から直接入れるように式台が備わる。さらに調査時に表土を除去したところ、式台の手前は玉石で区画され、内側に砂利を敷いていた。

表玄関のさらに北は座敷となり、主屋のなかでもっとも格式の高い部屋である。室内には書院、床、違い棚、長押などが設けられ、書院造りにおける座敷の意匠が整っていた。部屋の外側には廻縁があり、庭園を臨む。東側には脛脛石があるのみだが、北側へ降りると弧を描く飛び石によって、奥の間の前まで庭を巡ることができる。

また、各廊下の端には戸袋が設けられ、座敷の北にはほぞを設けた凝灰岩の礎石が残っている。

屋敷の西端には風呂・便所が設置されている。風呂の焚き口では炭化物を多く含む層を確認した。便所は大小の便槽を埋設する汲み取り式で、北側は小便用で陶器壺、南側は大便用で瓦質の便槽である。三畳の裏には石敷きがあり、建物解体前には庇の下に薪などが保管されていたという。なお、これらの風呂・便所・石敷きは建築士会の調査報告及び近隣住民の証言から、現代の増築であることが分かっている。

(3) 土蔵・付属屋

敷地の西奥には土蔵の基礎が残されている。石垣は約60cmまで積まれ、南向きに階段を設ける。基礎石垣の内側は固く締まる黄褐色整地層で、その下位は砂礫である。

敷地の南端、門から入って左には付属屋があった。建物は解体されているが、関連すると思われる石列が残されている。平行四辺形であり、位置も異なることから付属屋の基礎ではない。

(4) 庭

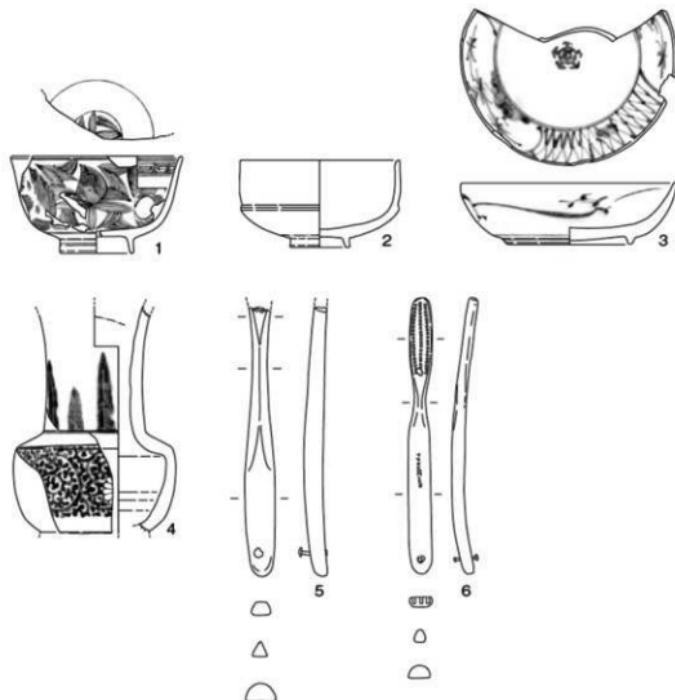
屋敷地内の庭は主屋の北と西で様相が異なる。北側はマキ・ウメ・カキなどの植栽や景石が配された庭園である。池は設けられていない。

一方西側は裏庭であり、近年までは畠として利用されていた。解体前はコンクリート製の肥料溜めもあった。石垣も畠とするためにつくられたものであり、表土の下位は砂礫層である。戦時に住宅の裏に防空壕を掘削した際の堆土を盛ったものであるという近隣住民の証言も得られた。風呂場の前から続く側溝と石列は庭を通じて北側の隣家へと延びており、モルタルによる成形と砾の固定がなされている。

2 遺物

近代に属する遺物は第Ⅰ層と第Ⅱ層から出土し、近世遺物も混じる。Ⅰ層中には板ガラスやプラスチック製品などの現代遺物も含まれていた。第Ⅰ層、第Ⅱ層から出土した近代以降の陶磁器は一部写真のみの掲載とし、ここでは若干の近世遺物と、特徴的な近代遺物のみを図化した。

1~4は第Ⅱ層中から出土した近世陶磁器である。第Ⅱ層出土の近世遺物は小片で、下層の遺物との接合も多いため、整地による混入と判断した。5~6は獸骨製の歯ブラシで、6の柄にはTOKUSEIHINと彫られている。



第9図 近代整地層出土遺物 (1/3)

※5・6は1/2

第1表 近代整地層出土遺物観察表

遺物 番号	種別	寸法(cm) ()は復元			外側 給付・釉薬	装飾			年代	産地	備考
		口径	器高	底径		内面	見込み	高台内			
1	染付碗	(10.4)	6.0	(4.4)	染付・透明釉	草花・團練・二重團練	雷文	草花・團練	19C前半～中頃	肥前	堀反窯
2	陶器碗	(9.8)	5.4	(3.6)	透明釉				17C末～18C前半	関西	實入
3	磁器皿	13.2	3.8	7.6	染付・透明釉	唐草・團練	網目・簇・二重團練	五弁花	18C中頃～後半	肥前	豪付に砂・コンニャク印刷
4	磁器瓶				染付・透明釉	蜘蛛草・葉・二重團練			18C中頃～後半	肥前	花生
5	軟骨製 齒ブラシ	長12.1	幅1.0	厚0.6					近代		
6	軟骨性 齒ブラシ		幅1.2	厚0.7					近代		「TOKUSEIHIN」

第3節 近世の調査

1 遺構

主に第VII層上面で検出した石組1基、土坑8基、石列1基、埋納遺構が1箇所である。各遺構からの出土遺物の詳細については観察表を参照されたい。

S 1（第12図）は石組である。S 2と近接しているが、S 2を切る別遺構として認識した。堀込みはなく、礫を平坦に掘えている。礎石の根固めとも考えられるが、ほかに同様の石組はない。

S 2（第13図・第17図）とS 3（第14図・第18図）は規模や埋土の特徴が類似する土坑である。いずれも直径1m前後、埋土には20～30cm程の礫が多く混入する。遺物は少ないが水鉢や擂鉢などの大型の器種で、図化したもののほかにも平瓦が出土した。7は瀬戸産の水鉢で、同一個体と判断できるものの体部と底部が接合しない。これらは礫廃棄土坑の可能性がある。

S 4（第15図）とS 5（第16図・第19図）も規模・埋土の特徴ともに近い。直径約80cmの円形で、埋土中に小礫を多量に含む。さらにS 6（第20図）も直径30cm前後と小規模ながら、やはり埋土に多量の礫を含む点では同様である。以上の共通点から、S 4～S 6は一連の遺構である可能性が高い。

S 7（第20図・第21図）はS 6とS 8を切る土坑であるが、S 8との切り合い関係はかなり不明瞭である。やや不整形の円形で、約2×1.2mを測る。遺物は比較的多く、肥前産の染付や青磁等に加え、土師質の焜炉（15）がある。円筒形で灰搔口がスリット状に口縁まで達し、上から見たときにはC字形となる。外面を赤く塗っており、後述する整地層出土遺物に同一個体の底部の可能性が高いもの（155）がある。

S 8（第20図・第22図）は短軸約1.5m、一部は調査区外に伸びる大型の土坑である。

S 7に切られ、S 6を切る。土坑の底面は地山と思われる礫層に達している。遺物の出土量が多く、特に埋土最下部で遺物の出土が多かった。24は文字をかたどった装飾金具と思われるが、上下表裏ともに不明で、判読はできなかった。図化したもののほか、平瓦も数点出土している。

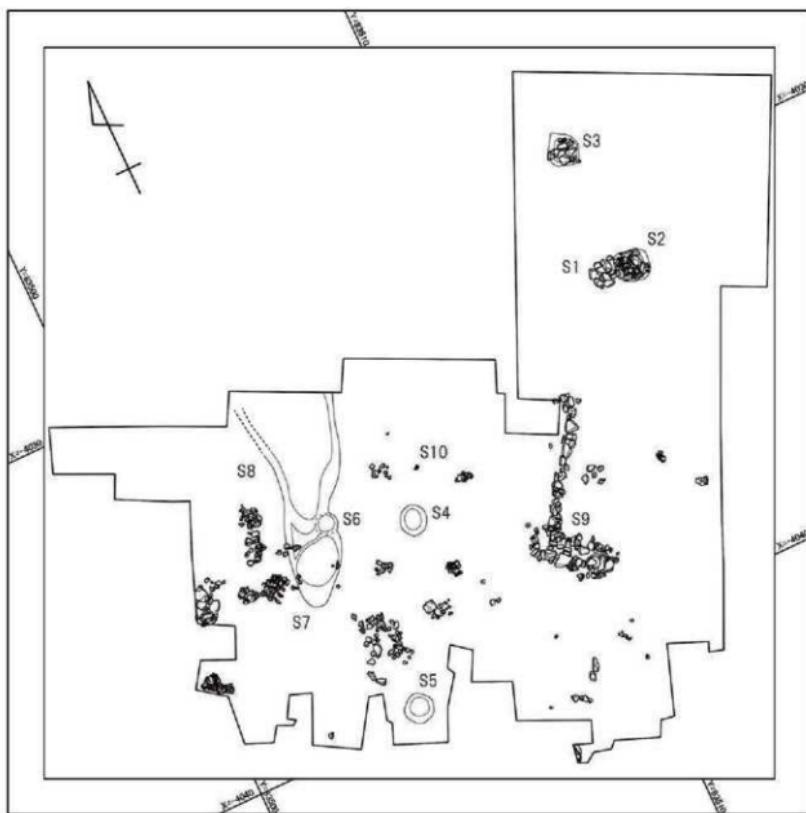
S 9（第23図・第24図）は石列である。20～30cm前後の礫をL字型に並べ、南側は約30cmの間隔を開けて2列平行になる。北側も同様であった可能性はあるが、北東の石列は検出されなかつた。南東端は土坑が付属し、完形の燔爐（37）とその下位に染付皿（34）が伏せた状態で出土した。このほかにも石列の内部や礫間での出土遺物が多い。土坑部分を除き石列間の埋土はほぼ1種類で、最下部で砂層となる箇所もある。石列間の底面はわずかに北が低く傾斜している。どのように機能したのか不明であるが、屋敷地の形状を考えると当時の主屋に関連した地下設備であったことは推測し得る。一部に砂層の堆積があったことも併せて、暗渠状の排水設備であったと考えられる。

S 10（第25図・第26図）は祭祀に関連する埋納遺構と考えられ、土師質皿片3枚分（43～45）と銭貨5枚（46～50）がまとまって出土した。第VII層掘削中に検出したもので、堀込みは確認できなかつた。また、出土した銭貨の鏽除去時に、除去した鏽の破片のなかに不規則に絡む纖維が含ることを発見した。非常に微細な破片であり図化することはできなかつたものの、錆着した紙と思われる。

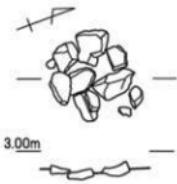
このほかに、遺構番号を付していない小規模な礫の集中が複数確認できる。いずれも第VII層の上面と掘削中に検出したものである。礎石転用後に残された根固め石の一部とも考えられるが、前述の土坑、石列もあわせて建築物としての間取りの復元はできなかつた。



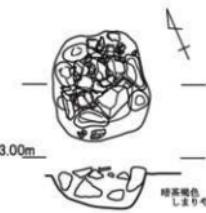
第10図 近世遺構検出状況(1/120)



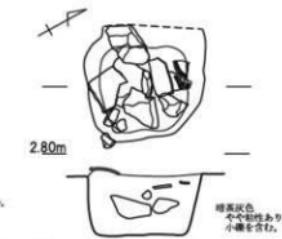
第11図 近世遺構配置図 (1/120)



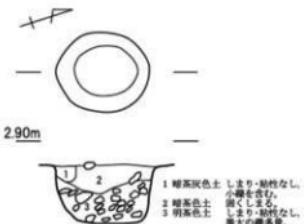
第12図 S1平面図・断面図
(1/40)



第13図 S2平面図・断面図
(1/40)



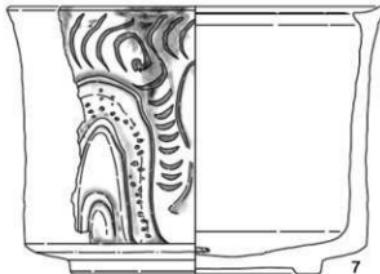
第14図 S3平面図・断面図
(1/40)



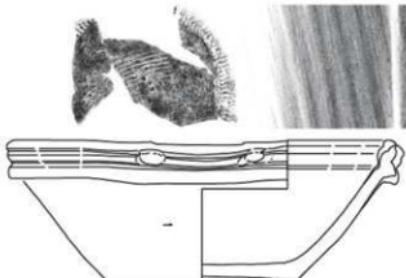
第15図 S4平面図・断面図 (1/40)



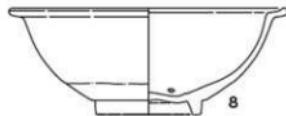
第16図 S5平面図・断面図 (1/40)



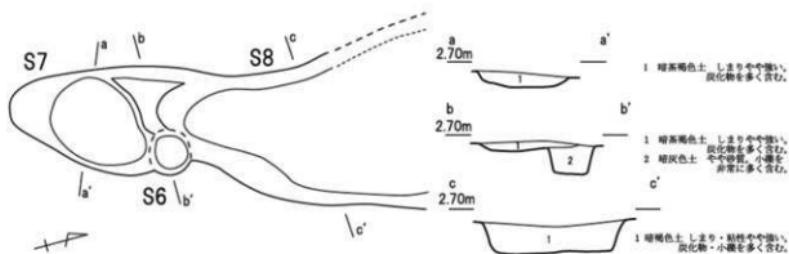
第17図 S2出土遺物 (1/4)



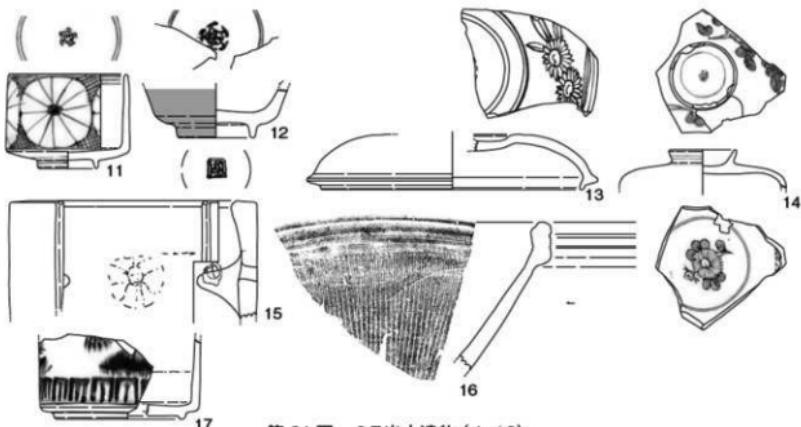
第18図 S3出土遺物 (1/4)



第19図 S5出土遺物 (1/4)

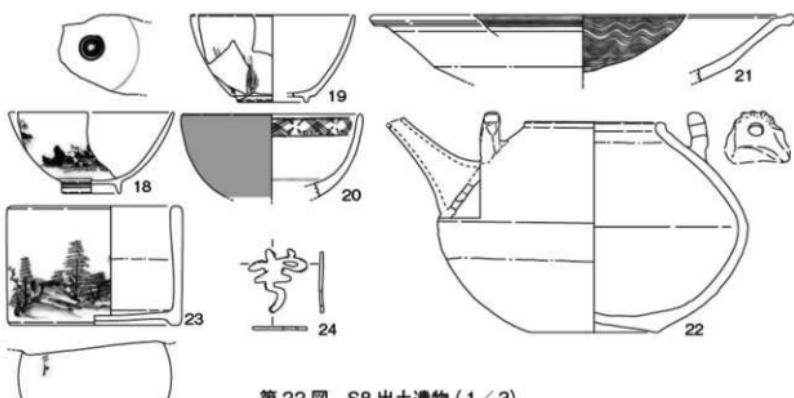


第20図 S6・S7・S8平面図・断面図 (1/60)



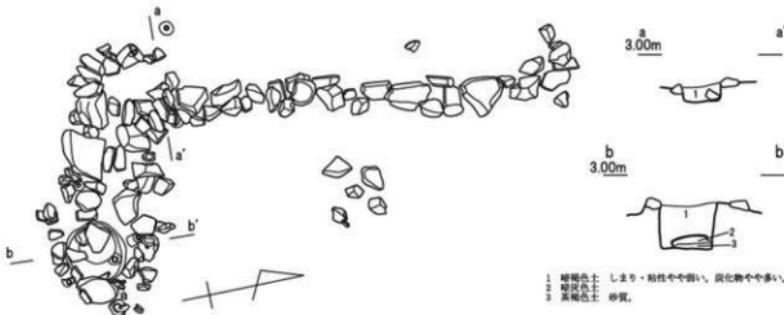
第21図 S7出土遺物 (1/3)

* 15は1/4

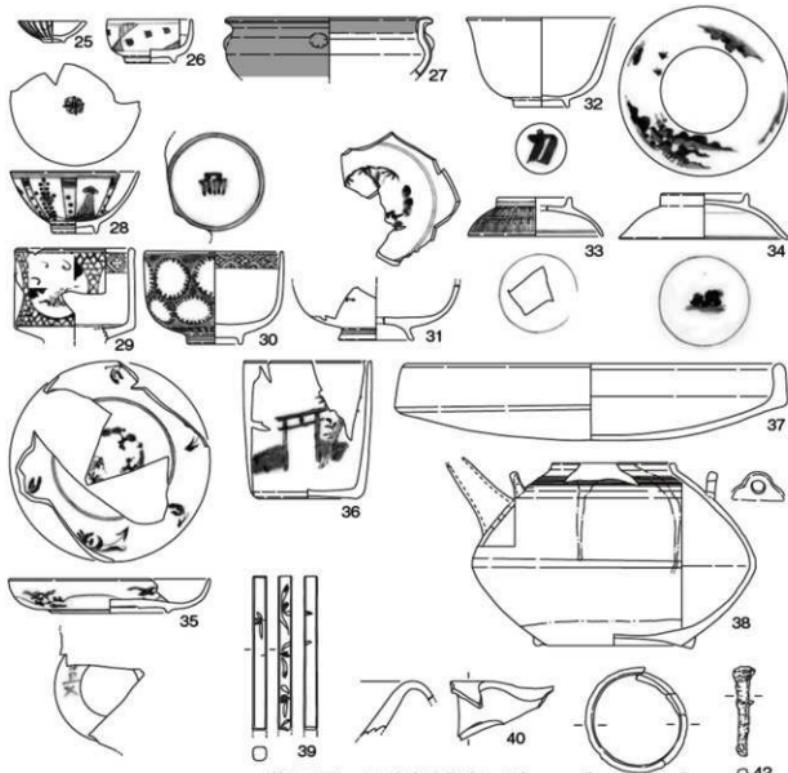


第22図 S8出土遺物 (1/3)

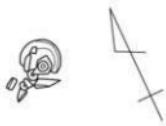
* 24は1/2



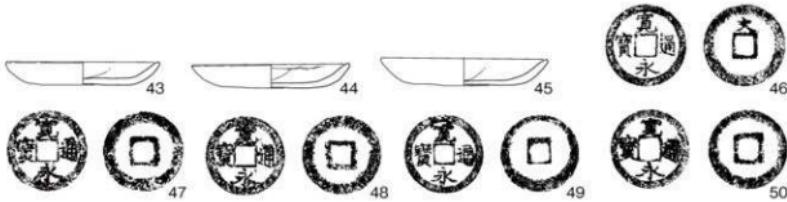
第23図 S9平面図・断面図 (1/60)



第24図 S9出土物 (1/3)
※37は1/4、39・41・42は1/2



第25図 S 10 平面図 (1/10)



第26図 S 10 出土遺物 (1/3)

※ 46～50は2/3

第2表 近世遺構出土遺物観察表

遺物番号	種別	法量(cm) (口付 器高 底径)	内面 外側 給付・軸裏	文様 内面	見込み	高台内	年代	産地	備考
7	陶質水鉢	G0.9 22.0 20.4	灰釉・絞釉 黒彩				18C 後半～19C	堺市	見込に日跡
8	陶器鉢	G22.4 10.7 8.6	黒灰釉・鉄釉				19C	萩	見込に日跡
9	陶器鉢	G0.1 11.5 15.7					18C 後半	那	
10	陶器鉢	G29.2	鉄釉・絞釉・白土	刷毛目			18C 前半	肥前	
11	磁器碗	7.3 5.8 3.5	染付・透明釉	菊花・格子・二重團綱	五弁花・二重團綱		18C 末～19C 初頭	肥前	型盤碗
12	磁器碗		(4.7) 青磁・染付		五弁花・二重團綱	「?」	18C 後半～19C 初頭	肥前	
13	磁器蓋	(16.2)	染付・透明釉	菊・團綱			18C 末～19C 前半	肥前	フマミ楓
14	磁器碗蓋		4.0	染付・透明釉	野菊・二重團綱	四方擣	18C 前半～中頃	肥前	
15	土師質土器 瓶	G20.0							外面に赤色・穿孔・内面にスス行着
16	陶器搖籃							那	
17	磁器火入		G.8	染付・透明釉	風景・蓮弁・團綱		18C 後半	肥前	絵の目凹型高台
18	磁器碗	(10.1) 50	3.6	染付・透明釉	風景・團綱・二重團綱	松の目・團綱	19C		
19	陶器碗	G10.0	54 (4.3)	鉄釉・透明釉	若松		18C 後半	関西	小杉碗
20	磁器碗	G10.8		青磁・染付	四方擣・二重團綱		18C 後半	肥前	くわらんか楓
21	陶器鉢	G25.8		鉄釉・白土	刷毛目		18C 後半	肥前	
22	陶器土瓶	8.5	13.0	7.8	鉄釉				底部にスス付着
23	陶器火入	10.7	7.3	10.4	染付・透明釉	風景	「?」		墨書き・貫入・口縁部釉剥落
24	銅製金具	長26 幅24 厚0.2							
25	磁器紅皿	4.2	1.3	1.4	白磁	菊花		18C～19C 初頭	肥前
26	磁器蓋物	5.1	2.7	3.0	染付・透明釉	蘋鶴・井桁・團綱		18C 中頃	口ハゲ
27	磁器火入	12.8		青磁・染付	花形洋文		18C 末～19C	肥前	
28	磁器碗	7.9	3.8	2.7	染付・透明釉	仮面・草花・二重團綱	?	18C 後半～19C 前半	肥前
29	磁器碗	7.0		色繪・透明釉	恋鶯・草花・水紋	四方擣・二重團綱		18C 中頃～後半	肥前
30	磁器碗	8.5	5.7	3.2	染付・透明釉	雪輪・蓮弁・二重團綱	源氏香・二重團綱	18C 後半	肥前
31	磁器碗		4.6	染付・透明釉	二重團綱	松竹梅・二重團綱	18C 後半	肥前	
32	陶器碗	9.2	5.5	3.4	灰釉		「力」	18C 後半～	関西 墨書き・貫入
33	磁器碗蓋	8.3	2.4	4.5	染付・透明釉	懸文・二重團綱	二重團綱	18C 末～19C 前半	肥前
34	磁器碗蓋	10.4	2.8	5.2	染付・透明釉	山水	二重團綱	岩流・團綱	18C 前半～中頃
35	磁器皿	12.3	2.1	7.2	染付・透明釉	唐草・團綱	草花	松竹梅・二重團綱	「?」
36	磁器筆筒	G7.7	8.5	6.0	染付・透明釉	鳥居・芝頭・唐木			肥前
37	土師質土器 壺	G30.7	6.3				18C 末～19C 初頭		
38	陶器土瓶	G7.59	11.2	8.3	鉄釉		18C 後半～	関西	底部にスス付着
39	ガラス製 かんざし		幅0.6厚0.6		花唐草				3面に鏡面
40	ガラス製品								
41	銅製引手	長4.4 幅4.2							鍍金残存
42	銅製釦	長3.7 幅0.9厚0.5							木片付着か
43	土師質土器皿	9.3	1.5	6.2					小皿・手捏ね・布帆？
44	土師質土器皿	9.7	1.5	6.4					小皿・手捏ね・布帆？
45	土師質土器皿	10.2	1.7	7.6					小皿・手捏ね・布帆？
46	銅鏡						1626～1668		古寛永・背面に「文」
47	銅鏡						1668～		新寛永
48	銅鏡						1668～		新寛永
49	銅鏡						1668～		新寛永
50	銅鏡						1668～		新寛永

2 遺物

整地層からの出土遺物は、出土層位によって大別して報告する。個々の遺物の基本的な特徴は一覧表に記載してあるので、そちらを参照していただきたい。

51は外面に蓮弁を2段に施すミニチュアの磁器である。58は陶器の小壺であろうか。器壁は薄く、体部外面から高台内は白色化粧土の上に透明釉がかかり、壺付は無釉である。残存する見込は無釉で、素地に胡粉のような白色の顔料を重ね、赤・黒・金で絵付を施している。高台内には釉下に「宝山」の墨書銘がある。また、図化し得なかった口縁部の小片があり、外面は白化粧土に透明釉、内面は白色顔料が塗られた上に非常に丁寧な調整が施され、茶褐色を呈する。59は碗で、外面の詩は後赤壁賦である。67は外面の草花文と見込の五弁花に金彩で縁取りを描く碗。金彩はほとんど剥落しており、痕跡が確認できる。83は色絵磁器の輪花皿である。外面は赤、内面は赤・黄・緑・青・黒で絵付けする。84は呉須赤絵の磁器皿である。他の遺物に比べて古期の資料であり、伝世品であった可能性がある。93は合子の蓋であろう。わずかにツマミの痕跡がある。94は青磁釉の上に白土により花弁を描き、圓線とその内側の花弁を金彩で縁取る。99は土師質の焜炉片であると思われる。7つの孔が観察できる。103は肥前唐津産の擂鉢である。胴部下端には高台の貼付痕が残る。105・106は土製の人形である。型押しによって成形され、105は成形後に棒状の工具で内部を削り抜いている。106はやや粗い素地を成形後、透明釉がかかること。

110はチャート製の火打ち石である。複数の稜に潰されたような微細な剥離が観察できる。118と119は出土瓦のうち瓦当文様の残るものを見た。118は鳥衾の瓦当である。内面に工具痕が明瞭に残る。119は軒丸瓦の瓦当である。割れ口も黒色を呈し、一般的な瓦に比べて軟質な印象を受ける。巴文の周囲に圓線を巡らし、内面には布痕がある。

123は碁笥底の猪口であろう。132は蛇の目釉剥ぎを施した外青磁の碗である。見込は印判による五弁花。133は薄手の色絵碗で、色絵は剥落した部分が多いが、赤・黒の彩色を確認できる。136、137はいわゆる呉器手の陶器碗である。138の皿は大きさ、文様構成ともに82と同一であり、セットであったと思われる。140は陶器皿で、銅線釉に蛇の目釉剥ぎを施している。外面も体部下位と高台は露胎となる。149は肥前産の陶器壺で、肩部に花文様をスタンプし、線釉をかける。内外面に釉垂れがあり、高台付近から露胎となる。なお、口縁部周辺と胴部以下は接合しなかったものの、同一個体と認められるために一個体として図化したものである。153は瓦質の火鉢である。体部・脚部ともに内面には明瞭な刷毛目状工具痕が残る。外面は丁寧なナデ調整の後に脚台部に型押しによる装飾を施すが、剥落が著しく全容は分からず。154と155は土師質の焜炉である。154は角筒形で2辺に扇形の把手がつき、爪は3本と推測される。上面に「善吉」の刻印がある。155は円筒形で、外面は赤く塗られる。S7出土の15と同一個体の可能性がある。

【参考文献】

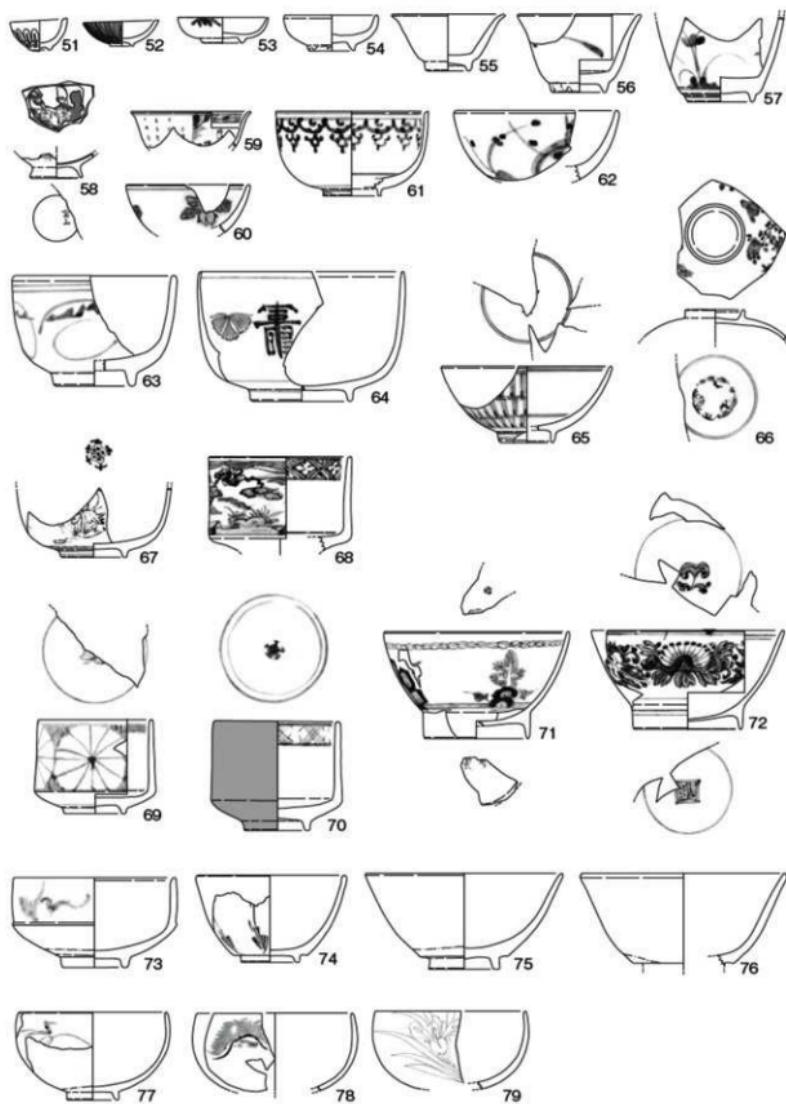
大分県教育委員会 1993 『府内城三の丸遺跡』

大分市教育委員会 2003 『府内城・城下町跡 第12次調査報告書』

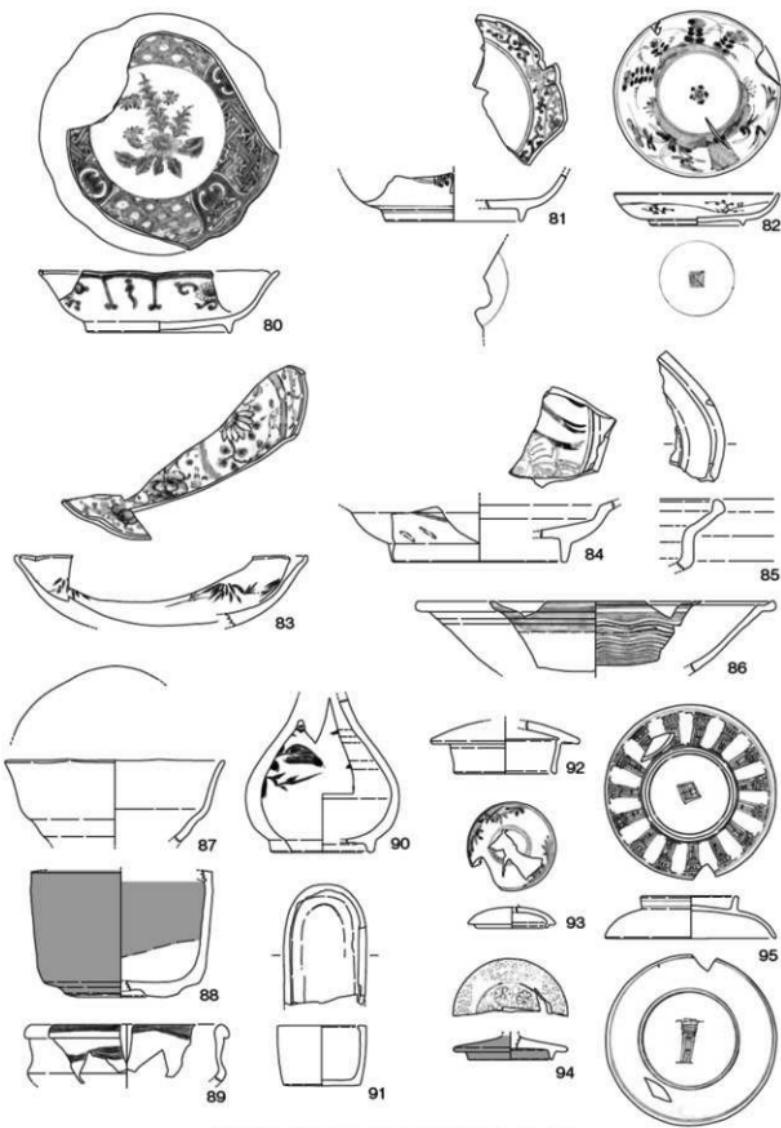
九州陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年』

古泉 弘 1987 『江戸の考古学』 ニュー・サイエンス社

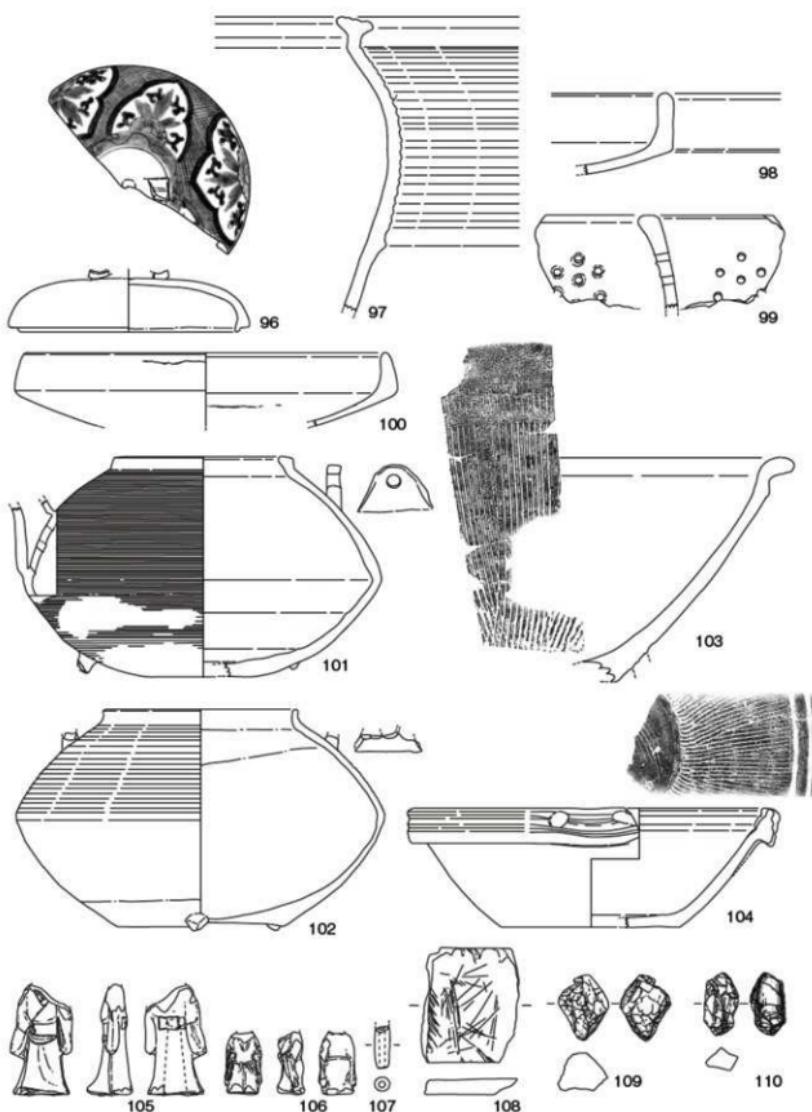
社団法人大分県建築士会佐伯支部青年部 1992 『山中家調査報告』『建築士大分』NO.61



第27図 第III層～第VI層出土遺物 (1/3)
※ 51は1/2

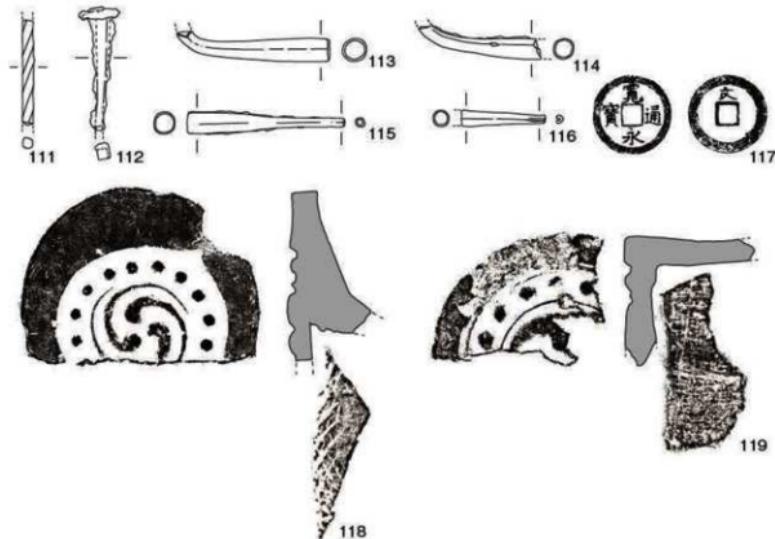


第28図 第III層～第VI層出土遺物2 (1/3)
※86は1/4

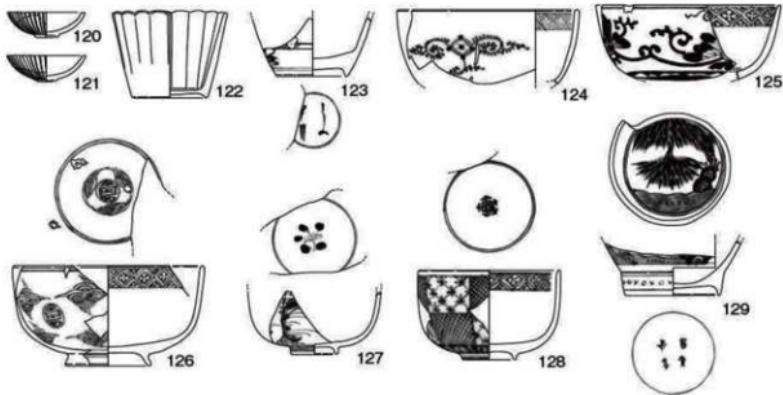


第29図 第III層～第VI層出土遺物3 (1/3)

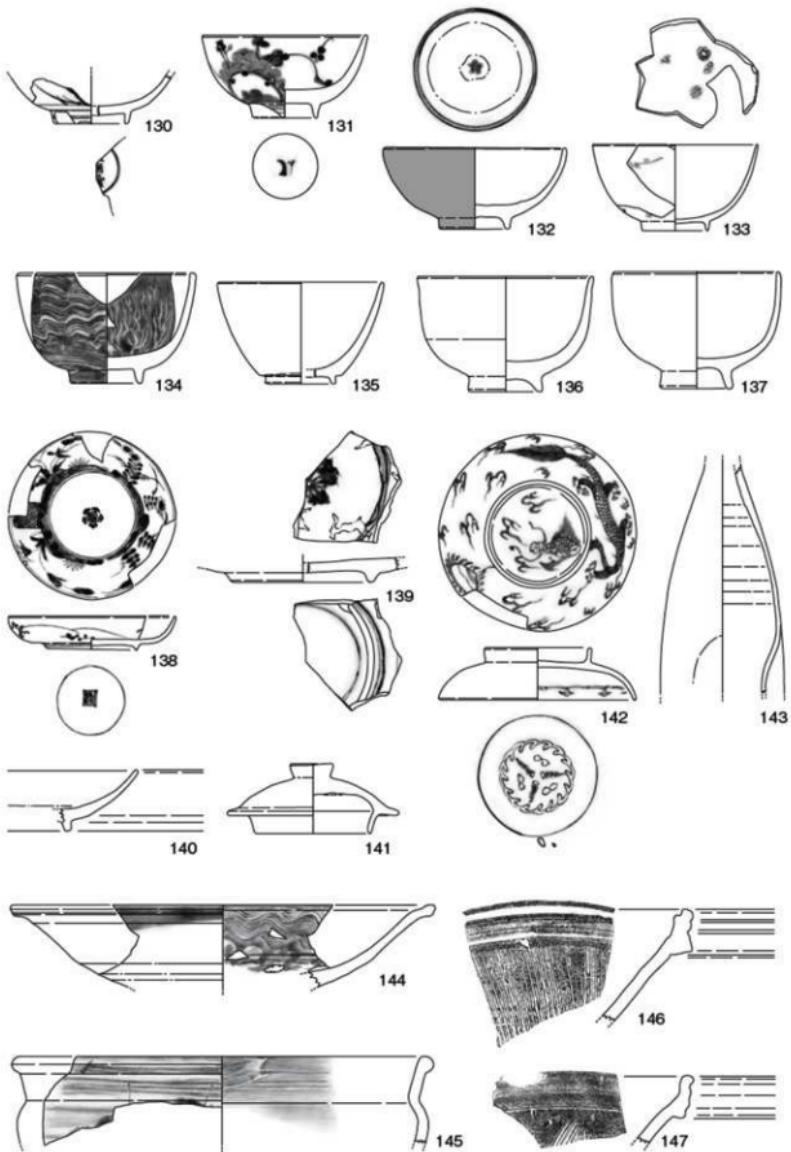
※ 97・100・104は1/4、109・110は1/2



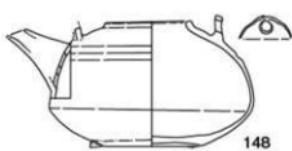
第30図 第III層～第VI層出土遺物4 (1/3)
※111～116は1/2、117は2/3



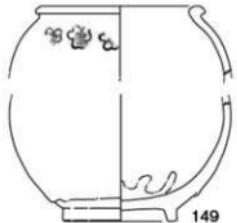
第31図 第VII層～第IX層出土遺物1 (1/3)



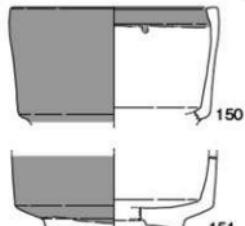
第32図 第VII層～第IX層出土遺物2(1/3)



148



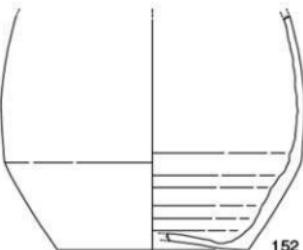
149



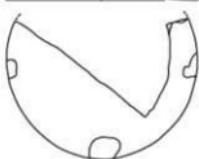
150



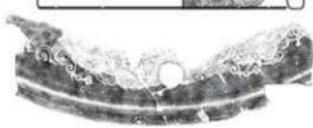
151



152



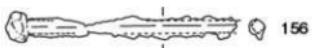
153



154



155



156

第33図 第VII層～第IX層出土遺物3 (1/3)

※ 153～155は1/4、156は1/2

第3表 近世整地層出土遺物觀察表

番号	種別	法量(cm) (高さ)	口徑 深さ 底径	繪付・輪裏	外面	装飾		年代	產地	備考	
						内面	見込み				
51	磁器紅瓶	23	12	10	白磁	蓮弁				肥前	ミニチュア・高台に砂付有
52	磁器紅瓶	47	15	14	白磁					肥前	型押し
53	磁器紅瓶	65.0	16	(25)	染付・透明釉	底				肥前	
54	磁器紅瓶	5.7	2.2	2.8	白磁					肥前	
55	磁器小杯	6.9	3.5	2.6	白磁					肥前	二次的被熱
56	磁器猪口	7.6	4.8	3.3	染付	?				肥前	高台に砂付有
57	磁器猪口			39	染付	草花・團線、二重團線				肥前	見込・景付に砂付有
58	陶器小杯			32	色絵・透明釉	植物?・彩色、金箔	「宝山」			関西?	胡粉に彩色か
59	磁器碗	7.4	(2.2)		染付・透明釉	人物・月・星・詩文・重團線	丸割き・團線			肥前	画面美濃後赤理試
60	磁器碗	7.7			染付・透明釉	草・團線				肥前	コニャク印判
61	磁器碗	9.0	5.2	(3.6)	染付・透明釉	安珠鑽ぎ文・二重團線	二重團線			肥前	
62	磁器碗	10.0	14.3		染付・透明釉	瑞獸・当輪				肥前	くらわんか彌
63	陶器碗	6.9	6.8	4.8	染付・透明釉	草花・團線、二重團線				肥前	陶胎染付・高台に付着物
64	磁器碗	12.6	8.0	(6.0)	染付・透明釉	蝶・葵・團線、重團線				肥前	口ハグ
65	磁器蓋物	10.0	4.7	3.2	染付・透明釉	詩文	二重團線	不明、二重團線		肥前	小広葉鏡
66	磁器碗蓋			3.7	染付・透明釉	草花・難	松竹梅・二重團線			肥前	二次的被熱
67	磁器碗			4.3	4.1	色絵・透明釉	草花・二重團線	五弁花		肥前	金彩
68	磁器碗	8.6			染付・透明釉	山水	四方擇・二重團線			肥前	筒型鏡
69	磁器碗	7.0	5.8	3.8	染付・透明釉	蝶子・荷花・二重團線	花?・團線			肥前	筒型鏡
70	磁器碗	7.7	6.8	4.0	青磁・染付		四方擇	五弁花・二重團線		肥前	筒型鏡・コニャク印押
71	磁器碗	11.3	6.6	(6.3)	染付・透明釉	松・龟甲・丸割き	不明	「○明○製」	肥前	肥前	広東鏡・見込みに目録・外面に付着物
72	磁器碗	11.7	6.1	(6.5)	染付・透明釉	牡丹・團線、二重團線	團線・唐草	團線・「?」	肥前	肥前	広東鏡
73	陶器碗	9.9	5.6	4.0	鉄輪・透明釉	不明				関西?	
74	陶器碗	(9.1)	6.0	(3.5)	鉄輪・透明釉	松				関西?	小砂碗
75	磁器碗	(12.3)	5.9	4.3	黒灰釉					肥前	
76	磁器碗	(12.6)			鉄輪・透明釉					肥前	画面美濃
77	陶器碗	(9.2)			色絵・透明釉	あやめ				肥前	色絵剥落
78	陶器碗	(9.5)			色絵・透明釉	松				肥前	画面美濃
79	陶器碗	9.0	5.4	3.1	鉄輪・透明釉	?				肥前	高台に施付有
80	磁器瓶	14.5	3.8	8.8	染付・透明釉	唐草	砂彫形・雲・草花	19C 前半	肥前	輪化	
81	磁器瓶			(8.3)	染付・透明釉	唐草	一夜草・二重團線	團線	肥前		
82	磁器瓶	10.1	2.0	5.6	染付・透明釉	唐草	松・蘿・團線	五弁花・二重團線	肥前		手塙皿・No.91とセット
83	磁器瓶	(17.9)			色絵・透明釉	竹	牡丹唐草・菊	18C 前半	肥前	輪化	
84	磁器瓶	(10.6)			鉄頭ボヘム・透	?		?, 二重團線	17C 前半	津州窓	色絵剥落
85	陶器瓶				長石釉				17C 前半・中頃	志野	貢入
86	陶器瓶	(29.2)			鉄輪・白土	硝毛目			18C 前半	肥前	
87	陶器瓶	(13.4)			灰釉				19C 前半	萩	天目形
88	陶器火入			5.4	青磁				18C 中頃・末	肥前	見込みに砂付有
89	陶器香炉	(11.6)			鉄輪・白土	硝毛目			18C 前半・中頃	肥前	
90	磁器瓶			(8.4)	染付・透明釉	草花			19C	肥前	
91	陶器盤	5.5 × 3.7	4.7 ×	3.8	透明釉						板作有
92	陶器土瓶蓋	(6.3)			鉄輪						貢入・内面にスヌ付有
93	磁器蓋	4.2			染付・透明釉	?					ツマミ痕・口縁に砂付有
94	磁器蓋	(5.1)			透明釉・白土	花・團線					金彩
95	磁器蓋	10.5	2.6	5.9	染付・透明釉	寿字文	團線・二重團線	「寿」・團線	18C 未 ~ 19C 初頭	肥前	
96	磁器蓋	(13.0)			染付・透明釉	碧玲・鶴・團線	目・画巻			肥前	
97	陶器蓋				鉄輪					唐津	
98	土師質土器焼									18C 未 ~ 19C 初頭	スヌ付有
99	土師質土器焼									19C	スヌ付有
100	土師質土器焼	(29.1)								18C 未 ~ 19C 初頭	スヌ付有
101	陶器土瓶	(10.8)	13.6	(6.0)	鉄輪					18C 後半	開西
											底部外側にスヌ

第4表 近世整地層出土遺物觀察表

遺物番号	種別	法算(cm)	山側	外側	裏側 内面	見込み	高台内	年代	產地	備考
102	陶器土瓶	(11.6) 137	102	灰釉				18C 後半	関西	
103	陶器壺鉢							18C 前半	関津	
104	陶器壺鉢	(29.0) 100	(14.6)					18C 後半	那	
105	土製人形		幅3.8 厚2.6						壓押し、中心に穿孔	
106	土製人形		幅2.3 厚1.7	透明釉					壓押し	
107	土鍊		幅1.0							
108	磁石		幅6.0 厚1.0							
109	火打石	長2.7 幅2.1 厚1.6								
110	火打石	長2.6 幅1.4 厚1.0								
111	ガラス製ねじり棒		幅0.5 厚0.5							
112	陶製釘		幅1.7							
113	銅製煙管	坪1.0						18C 前半	難首	
114	銅製煙管	坪0.9						18C 後半	難首	
115	銅製煙管	長6.5 幅0.9							吸口	
116	銅製煙管	長3.5 幅0.7							吸口	
117	銅鏡									
118	鳥糞									
119	軒丸瓦									
120	船型瓦	4.8 1.6 1.5	白磁	帶弁				18C ~ 19C 初頭	肥前	壓打ち
121	船型瓦	4.8 1.6 1.2	白磁	帶弁				18C ~ 19C 初頭	肥前	壓打ち
122	船型猪口	(6.9) 5.4	(4.0) 白磁					17C 末 ~ 18C 初頭	肥前	輪花・壓打ち
123	船型猪口		(4.3) 染付、透明釉	山水、二重團綱			「大明宣製」 -團綱	18C 中頃	肥前	甚筋底、足付に砂付着
124	船型碗	(11.2)	染付、透明釉	七宝、鈴付草	四方彌			19C 前半	肥前	
125	船型碗	(11.2)	染付、透明釉	花邊草	四方彌、二重 團綱			19C 前半	肥前	
126	船型碗	(11.5) 6.2	5.1 染付、透明釉	寿字、唐花、團 綱、二重團綱	四方彌	寿字、唐花、 花弁、二重團綱	19C 前半	肥前	見込みに付着物	
127	船型碗		2.8 染付、透明釉	雪輪、秋草、朱 豎文、二重團綱	花弁、二重團綱			18C 後半 ~ 19C 初頭	肥前	
128	船型碗	(8.6) 5.5	(3.2) 染付、透明釉	斜格子、蓮弁、 團綱	四方彌	五弁花、二重 團綱	18C 後半 ~ 19C 初頭	肥前		
129	船型碗		5.8 染付、透明釉	風景、幾何學、 二重團綱		風景、葉、二 重團綱	「大明宣製」 -團綱	18C 末 ~ 19C 前半	肥前	広東窓
130	船型碗		(4.5) 染付、透明釉	草花、二重團綱			「大明宣製」 -團綱	18C 後半	肥前	「大明宣德年製」 か
131	船型碗	10.1 5.1	(3.9) 染付、透明釉	梅花、雪輪、二 重團綱			「？」	18C 後半	肥前	くわわんか瓶、高 台に砂付着
132	船型碗	11.0 5.0	4.3 青磁、染付		五弁花、二重 團綱		18C	肥前	見込蛇の目輪溝、 高台に砂付着	
133	船型碗	(10.0) 5.3	4.0 土絵、透明釉	花辦	花			18C 前半	肥前	
134	陶器碗	(10.6) 6.8 4.2	鉄釉、白土 硝毛目					17C 末 ~ 18C 前半	肥前	
135	陶器碗	(10.0) 6.3 (4.2)	透明釉					18C 後半	関西	砂形碗
136	陶器碗	(10.6) 7.1 4.4	透明釉					17C 末 ~ 18C 前半	肥前	兵器手鏡
137	陶器碗	(10.0) 7.2 4.3	透明釉					17C 末 ~ 18C 前半	肥前	兵器手鏡
138	船型皿	10.2 2.1	5.5 染付、透明釉	唐草、二重團綱	秋草 - 蔭、團 綱	五弁花、二重 團綱	温福、團綱	18C 前半 ~ 中頃	肥前	手縫縫 - No.37 と セッタ
139	船型皿		6.9 染付、透明釉	團綱		菊花？、二重 團綱	18C 前半	肥前	コンニャク印判	
140	陶器皿	3.8	1.9 透明釉					17C 後半	肥前	見込蛇の目輪溝
141	陶器容器	7.0 4.3	鉄釉					18C	関西	
142	陶器蓋	12.1 3.2	6.4 染付、透明釉	蘆、雲、宝珠	輪室	草花、波瀾、 團綱	18C 末 ~ 19C 初頭	肥前		
143	陶器柄利		鉄釉							えくば有利
144	陶器鉢	(26.0)	鉄釉、絞釉、 白土		硝毛目			18C 前半	肥前	勘土目
145	陶器甕	(25.4)	鉄釉、絞釉、 白土		硝毛目			18C	肥前	
146	陶器壺鉢							18C 後半	那	
147	陶器壺鉢									
148	陶器土瓶	5.3 7.8 6.0	鉄釉					18C 中頃 ~ 後半		
149	陶器壺	(10.4)	7.0 絞釉	花					瀬戸	スタンプ
150	陶器火入	(12.6)	青磁					17C 末 ~ 18C 中頃	肥前	
151	陶器火入		8.0 青磁					17C 末 ~ 18C 中頃	肥前	
152	陶器燈		(11.9) 鉄釉						勘土目	
153	瓦質土器火鉢	(21.0)	?							壓押し黄角
154	土師質土器燈炉	21.6								板作り・「善吉」 模印
155	土師質土器燈炉		(20.2)							外面赤色
156	陶製釘		和12							

第Ⅳ章　まとめ

第Ⅰ章・第Ⅱ章で述べたとおり、本調査地には平成8年まで山中家の住宅があった。現代の増改築もあるとはいえ、周辺地区は江戸時代の風情を感じられる武家屋敷通りとして地区住民や観光客にも知られており、山中家住宅も残された数少ない武家屋敷として認識されてきた。平成3年に実施された（社）大分県建築士会佐伯支部青年部による調査においても近世武家屋敷の特徴を有することが確認され、増改築や屋根が茅葺きからセメント瓦葺きに変わっていることを除けば建築年代は幕末頃であろうと推測している（注1）。しかし明確な根拠は得られておらず、今回の発掘調査によってさらなる検討が可能となつた。

調査開始時に残されていた礎石のほとんどは下半が土中に埋まっており柱位置とも一致するため、平成8年の解体工事の際にも大きくは動かされていないと判断した。礎石はその多くが第Ⅱ層上面からの堀込みもしくは第Ⅱ層中に据えられ、同層出土遺物のなかに近代遺物が含まれることから、考古学的には近代以降の建築であると判断できる。さらに調査中に近隣の住民からの情報も得ることができた。太平洋戦争以降は屋根構造を茅葺きからセメント瓦葺きに改修した以外は構造に大きく手を加えていないことも判明し、建築年代は近代におさまるものと考えられる。従って、旧山中家住宅主屋の評価としては近世武家屋敷の様式を備えた近代建築ということになろう。

今回の発掘調査では近代の遺構検出面の下位に近世の遺構面と整地層を確認することができた。出土遺物は概ね18世紀後半から19世紀初頭を中心とした碗や皿が多く、このほかも擂鉢・土瓶・焜炉などの日常生活品である。調査時の印象としては、図化していないものも含めて紅皿の出土が比較的多く、さら

に細かな細工を施したかんざしや鳥衾の出土もあり、武家の生活の様式や格式を感じさせる資料である。なお、鳥衾は鬼瓦の上部に乗せられる円筒状の瓦であるが、これが主屋に設置されていたかどうかには注意を要する。当時の山際地区は湿田に面しているうえ建物もなく、防火対策の必要性は低い。宝暦5年（1755）に城下での瓦葺きが許可されている（注2）が、山中家屋敷では近代に至るまで瓦葺きを採用しなかつたとも考えられる。土蔵または門に設置されていた可能性も考えなければならない。

検出した近世遺構は石組・土坑・石列・祭祀関連遺構である。なかでも地鎮等に関する遺構としたS10において、銭貨に錆着した紙の痕跡を確認したことは興味深い。付着した錆を除去した後に発見したため正確な状況は明らかにできないが、5枚の銭貨は重なつて錆着していたものではなく、また銭貨の両面に紙の痕跡があるものがあった。このことから土師質皿と銭貨、紙の具体的な設置状況を推測すると、土師質皿を重ねた上に紙を敷き、その上に銭貨を置いてさらに紙を被せた、もしくは土師質皿の上に一枚ずつ紙で包んだ銭貨を置いたものと思われる。

また、近世整地層出土遺物は遺構検出面の上位と下位に分けて報告したものの、どちらも18世紀後半から19世紀初頭を中心としており、遺物から時期差は見出せない。第Ⅶ層以下は比較的厚く広範囲に堆積している一方、第Ⅲ層から第VI層は断続的な堆積状況であることを考えると、前者を建築前の基礎的整地、後者を後の沈下や不陸をならす二次的整地のように捉えるのが妥当であろうか。

今回の調査で検出した遺構から建物の復元にはいたらなかったが、山中家屋敷跡周辺の地形は干涸を埋め立てた佐伯城下町では数少ない丘陵地であり、生活条件が良いことから

近世初頭の藩政開始と同時に上級の屋敷地として整備されたと考えられている。したがって18世紀以前にも整地が行われ、屋敷が建てられていたはずであるが、今回の発掘調査では18世紀を廻る遺構や整地層は見られなかった。これまでの佐伯城下町での発掘調査に共通して、近世中期以前の遺構・整地層が見られず、近世後期から幕末の整地層の下位は地山となる干潟の砂層である。古期の整地層が確認できない原因は筆者の力量不足もあってこの場では明らかにし得ないが、現在のところ近世中期以前の佐伯城下町は一枚の絵図と古文書類から知ることができるのみで

あり、近世初頭から中期にいたる様相の解明は、佐伯城下町発掘調査における大きな課題として残されている。

発掘調査後の山中家屋敷跡は計画に沿って広場として整備された。礎石を原位置に復元し、各部屋、廊下、土間部分のそれぞれの仕上げを土系舗装、砂利舗装、三和土舗装とすることで、間取りの特徴を視覚的に表現している。庭木や景石もほぼそのまま活かして若干の植樹を行い、ベンチを設置した。現在は「山際史跡広場」となり、山際通りを散策する観光客や住民にとって、腰を下ろせる休憩所として利用されている。

【注】

1. 社團法人大分県建築士会佐伯支部青年部 1992 「山中家調査報告書」『建築士大分』No.61
2. 佐伯市 1982 『佐伯 歴史文化環境整備計画のための調査報告書』



山中家屋敷跡 調査前 西から



調査区全景 第Ⅱ層上面 西から



南北方向土層1



南北方向土層2



東西方向土層1



東西方向土層2



第Ⅱ層上面 燃土 東から



第Ⅱ層中 玄関右列 西から



第Ⅱ層上面 台所排水 西から



第Ⅱ層上面 式台 西から



第Ⅱ層上面 風呂・便所 南から



第Ⅱ層上面 瓦質便槽 北から



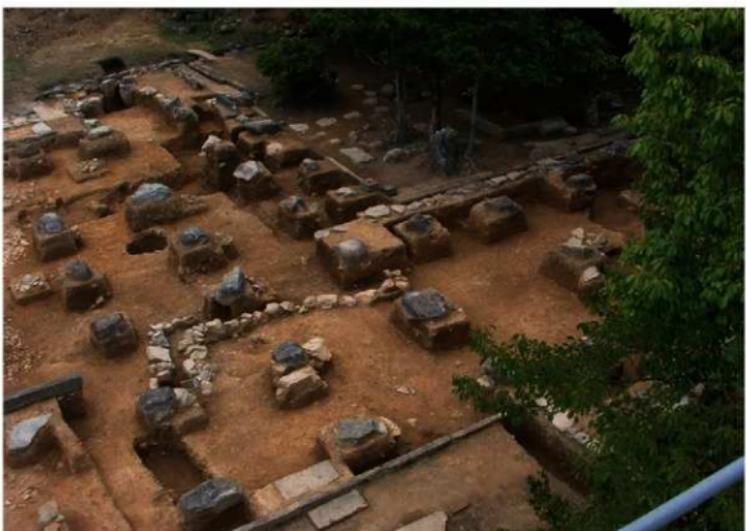
第Ⅱ層上面 石敷き 西から



第Ⅱ層上面 庭の側溝 南から



調査区全景 第IX層上面 西から



調査区全景 第IX層上面 南東から



S2 検出状況 南東から



S2 土層 東から



S3 検出状況 東から



S3 実掘状況 東から



S5 土層 東から



S6 土層 東から



S8 遺物出土状況 西から



S10 遺物出土状況 北から



S9 検出状況 東から



S9 炮烙出土状況 南東から



第4層上面 磁磚出土状況 東から



発掘作業風景



発掘作業風景



山中家屋敷 薬医門



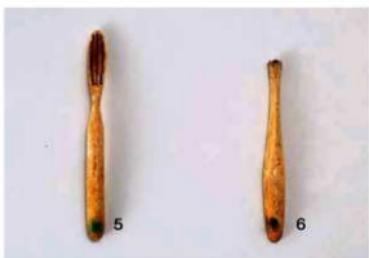
山中家屋敷跡整備後（山際史跡広場）



第Ⅰ層出土遺物



第Ⅱ層出土遺物 1 (陶磁器)



第Ⅱ層出土遺物 2 (歯ブラシ)



第Ⅱ層出土歯 ブラシ柄



S2 出土遺物 1 (水鉢)



S2 出土遺物 2 (鉢)



S7 出土遺物



S8 出土遺物 1



S8 出土遺物2 (装飾金具)



S9 出土遺物1 (かんざし)



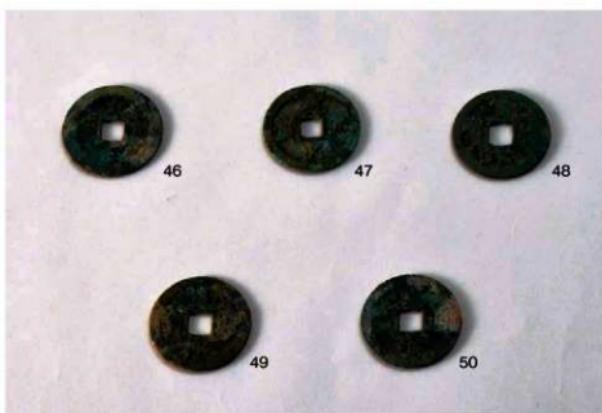
S9 出土遺物2 (焰焰)



S9 出土遺物3 (焰焰・ガラス製品以外)



S 10 出土遺物1 (土師質皿)



S 10 出土遺物2 (銭貨)



S10 出土銭貨に錆着した繊維 (スケールの目盛りは 1mm)



第三層～第六層出土遺物1(碗・皿・蓋)



第三層～第六層出土遺物2(碗・皿・蓋以外)



整地層出土小坏 (58)
左上:侧面 右上:内面
左下:高台 右上:断面



第Ⅲ層～第Ⅵ層出土遺物 3 西から



第Ⅲ層～第Ⅵ層出土遺物 4 (人形)



第Ⅲ層～第Ⅵ層出土遺物 5 (火打ち石)



第VII層～第IX層出土遺物 1(碗・皿・蓋)



第VII層～第IX層出土遺物 1(碗・皿・蓋以外)

報告書抄録

ふりがな	さいきじょうかまちいせき やまなかけやしきあと
書名	佐伯城下町遺跡 山中家屋敷跡
シリーズ名	佐伯市文化財調査報告書
シリーズ番号	第3集
編著者名	福田 聰
編集機関	佐伯市教育委員会
所在地	〒876-0853 大分県佐伯市中村東町6番9号
発行年月日	2013年3月31日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
さいきじょうかまち 佐伯城下町	あおいたけん さいきし 大分県佐伯市 じょうかひがしまち 城下東町799番	44205	205012	31° 53' 36"	32° 57' 37"	20090427 ~ 20090715	750	記録保存調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐伯城下町	城下町	近世	石列・土坑 埋納遺構	近世陶磁器・土器 金属製品・錢貨	

佐伯市文化財調査報告書第3集

**佐伯城下町遺跡
山中家屋敷跡**

平成21年度街なみ環境整備事業
旧山中邸広場整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

2013年3月31日

発行 佐伯市教育委員会
〒876-0853 大分県佐伯市中村東町6番9号
TEL 0972(22)4234 FAX 0972(22)3912

印刷 元星印刷株式会社
〒876-0811 大分県佐伯市鶴谷町3丁目1番9号
TEL 0972(24)0900 FAX 0972(23)2420